
とあるIS使い

野鳥獸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるIJS使い

【EZコード】

N9622Y

【作者名】

野鳥獸

【あらすじ】

学園都市の中で第6位に位置する発火能力者が授業の一環で学園外の施設警備をするため展示会場の視察に来ていたが、展示されていたISに触れてしまつ。提供していたIS学園の教師人の前で起動させてしまった。

学園都市から離れ、IS学園に転入することになってしまった少年の物語。

紹介（前書き）

作者は、ガンダム好きです。
主人公がたまに壊れます。

紹介

学園都市では、能力5の発火能力者の力を持つ少年は、学園外で行われる展示会に警備員として行ったが搬送されているISに触れてしまいあろう事か起動させてしまう。ISを扱う二人目の男として学園都市から専用機を託されIS学園に舞い降りる。

その少年の名前は、白井紅兎シロイ セキト

年齢：16歳

容姿：茶髪の赤目 イメージ（輝きのタクトに出でるシンドウ・

スガタ）

専用機：暁あかつき

一次移行：真紅で背中に2翼ある。（WG）

武器：ランス「能力使用可能」バスターライフル×1 ビット兵器「翼内蔵型」 シールド 高起動型（MAバージョン） イメージ（初期ガンダムWを紅色に染めた感じ）

二次移行：黄金で縁が真紅。背中に4翼あるがAB及び、エネルギー吸収転換機構

（WG0カスタム+暁能力） イメージ（後期ガンダムWのカスタムを金色にした感じ。）

武器：ランス バスターライフル×2 ビット兵器「翼内蔵型」サーベル「雪片の弱体版」両肩部ガトリング砲・・・追々追加します。

AB：アンチ・ビームの略です。要するにビーム兵器が効かない反則機です。

一次と二次移行の同一点は、紅鬼の能力使用可能な点くらいです。

エネルギー吸収転換機：相手のエネルギー射撃を取り込み自機のエネルギーに転換するための機構。

紹介（後書き）

変更多し！

プロローグ（前書き）

携帯止められたので、PCで執筆開始。
元紋章学です。

プロローグ

ここは、学園都市 東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では、"超能力開発"が学校のカリキュラムに組み込まれており230万の人口の実に八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいるのだが・・・

「お兄様ー何処ですのーー!」

中学生でこの学園都市内の風紀委員に勤務する俺の妹 白井黒子が "お兄様"と呼んでいる少年の物語なのだが・・・少年は、すでに家を出ており妹の声がむなしく響くだけだった。

第177支部隊

「紅兎君黒子ちゃん待たなくて良かつたの?」

この支部に部長をする女性に呼ばれえ書類から頭を上げ話出した少年がこの物語の主人公 "白井紅兎" 茶髪の赤目

「良いも何も、明日から学園外で行われる展示会の資料製作を夜明けとともに開始すると昨日連絡したにもかかわらず忘れている黒が悪い。」

紅兎が言つ様に連絡したのにいつもと同じ07:00に起きて俺が住んでいる寮に行き探しまわったという黒妹が悪いのだ。しかも俺に対する過剰までのブランク・・・

「お兄様ー黒子は、黒子は、お兄様の温もりが!」

といつもの台詞と共に後ろに瞬間移動をしてまで、背中に抱きついでくる。

「黒、仕事中だ離れなさい。」

「嫌ですわ！」

「はあー、」の書類が出来上がり次第、現地に行つて警備配置の確認が有るんだよ

兄と妹のやり取りは、恒例行事なので周りわ微笑ましく見ている。出来れば止めて欲しい。そこにようやく救いが現れた。

「黒子、紅兎さんの仕事また邪魔してるの？」

「」の支部と関係ないが、この学園として超能力者第3位に位置する超電磁砲こと”御坂美琴”である。美琴が来るところの妹は、ターゲットを変更して彼女にダイブ！！

バチバチ！

と黒子が電撃をうけ崩れ落ちる。

「助かつたぞ美琴。流石第3位だな。」

痺れている黒子を無視して俺のほうに来て・・・

「何言つてるんですか、第6位の発火能力有るじゃないですか？」

そう白井紅兎は、発火能力で第6位に位置する超能力者だ。

「 美琴・・・流石に実の妹を焼きたくは、ないぞ。それに支部が消し炭になる。」

紅兎の意味を体で経験済みの人たちは、顔面蒼白になる。一度紅兎をほんきで怒らし支部にあるすべての金属を融解させ消し炭にかかりつた事を思い出したようだった。

「 よし、書類製作終了」と

タン！

最後のEnterを打ち終え上着を羽織ると

「 じゃ、学園外の展示施設に行つてきます。美琴、黒に襲われない様にな（笑）」

支部を出ると同時に黒子が復活したらしく美琴の悲鳴が聞こえた。

プロローグ（後書き）

とあるキャラは、プロローグのみの参加となります。他わたぶん夏休みか冬休みあたりかな？基本軸は、ISに置きたいと思ってます。

プロローグHの起動（前書き）

かなり短いです。

プロローグEIS起動

書類を終え、会場施設にいき指示を出す中一人の女性が近付いてきたその女性は、黒髪に凜とした黒いスーツが似合ひひとつだった。

「君が学園都市から来た者か？」

「はい、学園都市第177支部より派遣されてきました白井紅兎です。」

「そか、若いのに良い指揮をしているから気になつてな。」

「いえまだまだです。人の死角を潰すだけでも苦労しています。」

死角を潰すのに苦労していると聞いた女性は、興味を持ったのか聞いてきた。

「ほーたとえば？」

「例えば、このホール入り口ですが一見見晴らしが良いですが、会場に押し寄せるお客様を想定すると、入り口手前の両角かとEISを展示する二つの・・・」

EISを展示してある場所のそばで、触れるというジェスチャーをしようとしてEISに触れてしまいそれは、起こった・・・

「搭乗者確認・・皮膜装甲展開・・推進機正常作動・・近接ブレー
ド展開」

男である俺がＩＳを起動させてしまつた。もちろん近くにいた女性が驚愕していたのは、言ひまでもない。

「まさか一夏だけでなく他にもＩＳを動かせる奴が居るとわな・・・

」

女性がどこかに電話した後向き直り・・・

「よく聞け、白井紅兎・・明日より学園都市からＩＳ学園に転入とする。」

「え・・・ええええええええ・・・」

「それから私は、ＩＳ学園で教師をしている。織斑千冬だ。学校では、織斑先生と呼ぶよつこー！」

ゆづむを言わさず紅兎は、ＩＳ学園に行くことになつた。会場から学園都市に帰るとすでに通知書が支部に回され学園にも回つていた。諦め、寮に戻ると既に荷物が全てＩＳ学園に送られておりもののけの空になつていた。

「会場からたつた一時間でこれかよ・・・黒絶対煩いだらうな・・・気が重くなる。」

案の定黒子わ既に知つており『これからお兄様の温もりが』と黒いオーラが噴出していた。

すまん美琴犠牲になつてくれれ。ＩＳ学園に向かうことになつた。

プロローグ～起動（後書き）

本当にみじかくて済みません。次回から本編に入りたいと思います。

「人目の黙の子」（前書き）

本編書いていきたいと思います。

一人目の男の子ーー！

学園都市から全ての荷物が運びだされていた事に驚きと諦め付きINS学園に向かつた。

INS運用協定：INSの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達は、原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは、協定参加国の共有財産として公開義務があり、また黙秘・隠匿をおこなう権利は日本国に無い。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は、公平に介入し、協定参加国が理解できる解決をすることを義務づける。

INS操縦者育成機関についてより抜粋

「要するに、別国家から良いように扱われてる分けか・・・情け無いな。」

今まで住んでいた部屋に有つたINS教本を読みながら学園行きのモノレールに乗り読んでいると、アナウンスが流れた。

「「」乗車有り難うございました・・・まもなく終点INS学園前・・・お荷物等お忘れにご注意下さい。」

紅兎は、教本から顔を上げると辺りを海に囲まれた学園・・・学園施設でできた島が目に入ってきた。

「INS学園ねー・・・どうなるかな。」

学園校門前にいくと警備の時にいた女性”織斑千冬”がまつっていた。

「織斑さん、勝手に荷物手配しないでください荷物が無くてあせつたんですからーーー。」

「それわすまなかつた。白井紅鬼歓迎してやる。ついて来い。」

「織斑さんは、謝罪であたまを下げた後着いて来るようひと言つた。受付で書類にサインし職員室に向かつた。

「ここでは、先生と呼ぶよつにし。」

「はい、織斑先生。」

職員室に入ると他の女性職員の田が獲物を見るようでかなり怖かつたことを記しておく。

「よし白井、これがお前の制服になる。あとこれも。」

織斑先生から制服を一着と・・・

「鍵?」

「そつだしづらく使う寮の部屋の鍵だ。その部屋は、もう一人の住人も居るから仲良くしろよ。制服に着替えたら教室に行くぞ。」

職員室備え付?けの更衣室で白を基調とした制服に袖を通した。

「なぜ、サイズがピッタリなんだ?」

「白井着替え終わつたか?」

なぜか合ひ制服に疑問をもつたが更衣室の外から織斑先生の声がしたため考えを中断し更衣室を後にした脱いだ服は、教室に行く前に部屋の鞄にいれた。

「よし、名前を呼んだら入って来い。」

織斑先生が先に教室に入り・・・

「山田君授業中済まない。・・・今日から学園都市から転入することになった奴が居るが決して騒ぐなよ・・・白井入って来い。」

織斑先生に呼ばれ教室に入り、教団に立っている織斑先生の隣に立つて自己紹介になつた。

「ただいま紹介が有りました学園都市から此方 I.S 学園に転入することになった、白井紅兎です。新たな環境で不慣れなことも有りますが宜しくお願ひします。」

紅兎の自己紹介が終わると教室が静まりかえり・・・耳をふさいだ男子生徒が一人居た。

「お・・・

「お?」

「男!――――――――――――!」

先ほど耳を塞いでいた男子が耐え切れなかつたのか顔を青くして唸つている中女子の戯言が聞こえた。

「織斑君に続いて二人目の男子よ!」

「茶髪で宝石のよつなあの田崎麗」

「静かにせんか馬鹿者質問は、休憩時間にしろ。席は、布仏の隣だ。

」

席を探していると身長に合わないダボダボな制服を着た女子生徒が手を挙げ『二つだよ』と言ってくれた。

「布仏じゃないが、白井に教科書を見せてやれ。放課後に職員室に来い教科書を用意しておく。いいな?」

「はい。布仏さんよろしく。」

「よろしく、しーく君」

席に着いたことを確認すると

「では、授業の続きをする。」

後々わかつた事だが顔を青くし潰れているのは、織斑一夏・・織斑千冬さんの弟で織斑先生曰くフラグ一級建築の愚弟らしい。

「フラグってなに?」

一人目の男の子ー！（後書き）

取り合えずこんな感じです。次は、相部屋の相手がでます。誰が良いかな？

同居人（前書き）

変わるかも知れない同居人

同居人

IS学園に転入し昼休み・・・

「男が俺だけって心細かったんだ感謝するぜ。」

四現目が終わり、昼休みになり女子の声の犠牲者が声を掛けってきた。

「織斑先生の弟だよな？」

「織斑一夏だ。一夏と呼んでくれれば。」

「なら、紅兎と呼んでくれれば良い。」

「紅兎な。宜しくとも一緒に飯に行かないか？」

「構わないけど、一ちを見ているあの子は？」

紅兎達を睨み付けるいや羨ましそうに見る黒い長髪のモコボンで
結つてゐる子の視線を感じ一夏に聞いてみた。

「食堂で紹介するよ。時間無くなるぜ。」

「ああ・・・」

一夏は、先ほどの視線の子を連れ食堂に来て、自分の昼食を持って
空いている席に座った。

「じゃあ改めて白井紹介な、篠。」

長い髪の女の子の名前?を言ひつと・・・

「篠ノ之篠だよろしく白井。」

「ああよろしく篠ノ之。」

女子生徒の名前は、篠ノ之篠と言ひひじい。

「で、篠頼みがある。ISについて教えてくれ!」

なんでも紅兎が来る前の日、イギリス代表候補生に祖国を侮辱され
切れて喧嘩を買つたらしい。しかも一夏は、ISについてド素人の
状態で一週間後に戦うらしい。

「俺が思うに・・・一夏お前馬鹿だろ?」

「ぐつづつ・・・」

「白井の言う通りだ。簡単な挑発に乗りあつて。」

一人から罵倒され潰れる一夏に・・・

「篠ノ之、何か習い事していいか武術とか?」

「なぜその様な事を?」

「IJCに来るまでの間に教本を読んだんだけど、ISは、搭乗者の
動きをトレースして動かすと書いてあったから短い期間でも鍛える

事が可能かなど・・・な。」

紅兎の言葉に起き上がりる一夏。

「そうだ剣道全国大会優勝者に習えば・・頼む筈!-!」

一夏の頼みに唸る篠ノ之子に紅兎が小声で・・・

「篠ノ之、ここで一夏に教えれば一人つきりになれるぞ。」

紅兎に鋭い視線を送る

「なぜ私が!」

「気づかないと思ったか、一夏を見るときわづかに照れてるんだよ、お前ね。」

「うう・・分かつた放課後剣道場に来い。」

「ありがとう篠!あつ白井も来るか?」

篠ノ之のために

「悪い、用事だ。どちらにしろ織斑先生にも呼ばれているからバスだ。」

「そりが・・・」

「う」馳走様。先行くぞ。」

話しながら食べていた為、一人より先に食い終わった。去り際に『がんばれよ篠ノ之。』と言い食堂を後にし教室に戻り、残りの授業も難無く終え、放課後・・・

職員室

「織斑先生、教科書を取りに来ました。」

授業で言われた通り教科書を取りに来た。

「ああこれが教科書だ。ところで、織斑から聞いたか?」

「なにをですか?」

「決闘のことをだ。」

「聞きましたよ。イギリスの代表候補生に祖国を侮辱され切れたらしいですね。」

「お前ならどう見る?」

「簡単な意見なら、経験のある候補生ですね。あと・・篠ノ之に鍛えてもらつて何処まで食いつけるかかな?」

「篠ノ之とか・・・白井は、教えないのか?」

「候補生ならまだしも、素人だと死にますよ。灰も残さず。」

「・・・白井お前は」

「学園都市超能力者第6位？紅蓮の使い手（パイロキネシス）ですか。」

「そうかそうだつたな。」

紅兎の手に炎が現れ握り潰すと、織斑先生は、意味ありげに苦笑いをした。

「引き止めてすまなかつたな。帰つて良いぞ。」

「はいそれでわまた明日。」

紅兎が職員室から出た後織斑千冬の背中は、嫌な汗でベタツイティタ・・・

「とんでもない圧力だつたな。久しづりに冷や汗を搔いたな・・・」

寮にて・・・

「1026号室で合つてるよな・・・」

現実から田を背けたい状況になつていた。

「し～君どうしたの～？」

目の前には、狐のきぐるみを着た布仏本音が居た。布仏は、固まつた紅兎の握る紙と鍵を見て・・・

「し～君が同居人なんだね～よろしく～」

固まりから開放され、改めて・・・諦めた。

「で、何をやつてこむ？」

「し～君の髪の毛サリサリ～」

ベットに座つてこると、布仏がよじ登り頬ずりしていく。

「し～君の髪の毛気持ち良いね」

「夕食に行きたいんだけど・・・」

「レッジ」ホー！――

結局食堂まで肩車で行き、開放されたが食べ終わってまたよじ登つてきた。

端から見ると親子りしく上級生から暖かな眼で見られていた。

余談だが、布仏からは、本音と呼ぶよつこ又は、愛称で（苗字呼び）が気に入らないらしく。（篠ノ之内からは、篠と呼ぶよつこ（友として）言われた。

同居人（後書き）

結局・・布仏本音さんにしました。まあ作者のお気に入りなので（
笑）

頭冷やせんのか？（前書き）

漫画で一週間の出来事が省略されているのでオリジナル追加します。タイトルは、後書きで察してください。

頭冷やせいか？

同居人本音と朝食を取り終わり教室での一場面

「ちゅうとよひしへ」

自分の席に着き本音と今日の授業について話していると誰かを呼ぶ声がした。

「聞いてますー。」

「本音、誰か呼ばれているのか？」

「名前呼んでいないから違うともちつとも。」

名前を呼ばれるまで無視を決め込む・・誰の事が分からないし。

「あなたですわよーー。」

「おなじみ紅兎ー。」

「お早いわーまことに紅兎さん」

キイキイ声を上げて居るのを無視し挨拶を返す。

「ねっすー寝ね早ハ幕。」

「おつむーおはよーしのんもおはよー」

さつきから声を張り上げている人・・・分かると思つが、イギリス代表候補生セシリ亞・オルコットだ。

一夏は、席に荷物を置くと紅兎に小声で聞いてきた。

「さつきから紅兎の事呼んでいるんじゃないのか？」

「名前を呼ばれてるわけでもないし、アイツ日本人の事を極東の猿つて言つたんだろ？ だつたら猿語に翻訳してもらわないとな。（黒笑）」

「け・・結構黒いなお前・・・」

一夏にイギリスに喧嘩を売られた内容を昨日聞いていたため上から目線を全て無視するようにしていた。

チャイムが鳴り先生が来ているにもかかわらず金髪は、頭に血が上っているのか氣づいていない。

「おいー！」

「きこてますのー！」

「バンー！」

「イタ！ なんです！」

「チャイムが鳴り終わつてこるさつきと席に着かんか馬鹿者それとも、もう一発喰らいたいか？」

「済みませんー！」

織斑先生の出席簿が金髪に振り下ろされ、言い返そうとしたが流石に先生には、無理だった。

「今日のＳＨＲは、終わりだが・・白井さつきのは、なんだ？」

織斑先生に聞かれ立ち上るとありのままを答える。

「何だといわれても、こっちが聞き返したいですね。別に名指しで話しかけられた訳でも無し、それに昨日何処かの代表候補ともあるものが日本人に極東の猿といったらしいですね・・」

紅兎は、一度言葉を切り後ろの席に居て、笑っている女子生徒達に質問を投げかけた。

「でわ、笑っている皆さんに問います。日本人を極東の猿と言いましたが、ＩＳは、何処の国の人間が作り上げましたか？ＩＳが無ければあなた達は、この学園にこれましたか？どうですか？それとも理解できないかな？・・・俺を怒らすなよ死にたいなら別だがな・・・・クツクク」

途中から紅兎が手の平を上げると炎が現れた。

「理解できないなら俺が消し炭にしてあげるよ。生きてる価値無いし。少し頭冷やそうか？クツス」

「「「「ビック」「」「」」

流石にこれには、恐怖を感じたのか女子生徒の笑いが消え顔面蒼白にし怯えていた。そこに・・・

スッパン！

織斑先生の出席簿が落とされた。

「痛つ！」

「冷やすのは、お前だ！馬鹿者、脅してどうする……確かに工Sが無ければここに居ることも話す事さえ出来なかだらうな。お前達よく聞け！自國に誇りを持つのは、良い事だがオルコット日本を侮辱する事わ即ち私を侮辱するとの同意だ。私は、日本国民だからな。自分の言葉に責任を持って良いな！」

「…………」

「では、次の授業の準備をしておけ！以上解散！」

先生が教室を出ると一夏と篠が席に来た。

「凄いです。紅兎さん！」

「あれは、何だどうなつてこるんだ？」

「皿口紹介の時にも言つたる。俺は、学園都市出身だつて。」

「言つてたけど学園都市つてなに？」

「一夏……そこから…？」

「学園都市つて言つのは、超能力開発が学校のカリキュラムに組み込まれている養成学校で230万の人口の八割が学生がで占められ

ている特殊な都市だ。学問関連で考えれば水準だけでいえば、世界一位だらうな。」

「頭良いのか！」

「そこ」に食いつくか・・・

「教本渡されたんだが、電話帳みたいな厚さの教本読んだだろ！俺まだ読みきれてないけど・・・」

「ああアレか、学園に来る前に暇だつたから読んだけどもう読み終わつたぞ。てか小説みたいなものだろ？解説つきの？」

「…………はあー！？よみつきた！！」

「諦めろ一夏。現実とは、このようなものだ。」

一夏の問いにカミングアウトした内容にショックした一夏は、簾に慰められた？

だつまで聞いていた本音は、目を爛々と輝かせ一夏は、『仲間が出たと思ったのに』と死んだ魚の目をして簾に支えられ席に戻つた。

「可笑しな事言つたかな俺？」

「し～君は、可笑しな事言つてないよ～」

余談 この一軒で国の差別が減つた変わりに白井紅兎を怒らすな。一年一組の炎神と言つ渾名がつけられ紅兎が言い合いをする現場に

近づくと静かになり直ぐ仲直りをするようになっていた。

頭冷やせつか？（後書き）

今回の作品もオーリ主を怒らすと某管理局の白い悪魔の如し！
怖い！！『私、悪魔じゃないもん！少し頭を冷やそうか？スター・ラ
イト・ブレイカー』ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア

クラス代表決定戦！（前書き）

飛んで決戦開始だ！

クラス代表決定戦！

あつといつ間に月曜日が来てしつまた。いまアリーナの通路に一夏・
篠・紅兎が居る。

「なあ・・・篠」

「なんだ一夏」

「気のせいかも知れないんだが」

「やうか氣のせいだろ」

「ISの事教えてくれる話は、どうなたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・」

「田をそらすな。」

そう紅兎（俺）が見る限りここ六田ばかり剣道の練習しかしてない。ISのあの字も出無いくらい剣道ばかりしていた。篠も理解する様に一夏から顔を背け俺の方を向いてきた。

「一夏、専用ISが来ていなかつたんだ。剣道で少しばかり動くよくなつたんじやないのか？」

「そりやへそりだけど・・・」

「それに、お前二つの事を同等に理解できるのか？」

「つぐり・・・」

紅兎のいう様に一つの事を処理（覚える）のが苦手らしく何もしゃべらなくなつた。

落ち込む一夏を無視して篠と話していると・・・

パタパタ

子供が走る様な音が聞こえてきた。

「織斑君おりむじへんオリムラクン」

名前を連呼しながら駆け寄つて来る人がいた。

「見覚えあるが・・・誰だっけ？」

「・・・・・」

紅兎の言葉に『何言つてんだ』見たいな顔をされた。
一夏は、氣を取り直して

「どうしたんですか山田先生？」

紅兎は、驚いた『教室のマスッコトだと愚つた』などと口にわださなつかった。

「来ました！織斑君のHISと白井君のHIS...一ピットに搬入して有ります急いで下さごー！」

「一夏のは、分かりますが。なぜ俺まで？」

「それについては、私が説明するがまでは、準備しろ。アリーナを借りられる時間は、そうながくないぞ。」

来ていたのか歩きながら織斑先生が説明している。

「白井のは、学園都市がどつかの馬鹿ウサギに頼んでコアを提供してもらつたらしい。ああそれと、織斑の試合が終わつたら白井の専用機データーを取るからな。」

ガゴン

ピットに置かれた二つの内ひとつの中のコントローラーの扉が開き片方には『白』がいた。

白。

真っ白。

飾り気の無い、無の色。

眩しい程の純白を纏つた白I.Sがその装甲を開放して操縦者を待つていた。

そしてもう一つのコントローラーの扉が開くと『紅』がいた。

赤でなく紅。

紅全てを燃やそうとする炎の色

煌々とした真紅を纏つた白I.Sが早く暴れたいと待ちわびる様に待っていた。

一夏と紅兎がI.Sに見とれていると山田先生の説明が始まった。

「白色のI.Sが織斑君の『白式』^{ヒヤクシキ} 紅色のI.Sが白井君の『暁』^{アカツキ}です。」

「

一夏の装着と平行して白井の装着となつた。

「背中を預けるよつこ・・・ああ、そつだ。座る感じで良い。あと
は、システムが最適化をする。」

二人は、織斑先生の言葉通り、装甲が開いているHSに体を任せると、受け止める様な感覚がしてから、直ぐに体に合わせて装甲が閉じる。

「白井君のは、珍しいですね。フルスキン全身装甲ですか。違和感ありますか？」

「特に有りませんがビリやけ、自身で最終調整しないといけないみたいですね。」

「HSのハイパーセンサーは、問題なく動いているな？一夏気分悪くないか？」

織斑先生は、本氣で心配らしく姉弟読みになつていた。それに一夏は、それに察し

「大丈夫、千冬姉。いける」

と答えると、発艦場所に移動し筹と少し話すと空へ飛びつ発つた。

一方紅兎の方は、教師陣にも見えるように空中投影でシステムチエックをしているのだが・・・

「何だよこれ！最低限のOSしか出来ていないじゃないか……」

紅兎は、いつたんISを降りるとOS製作に取り掛かった。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ

一秒間に何回キーを打ち込んでいるか見えないくらいの速度でOSを作り出していく。

「ふえ～ん目が着いていきません！」

山田先生の泣き言を無視して作つていく。

「「・・・・私達は、一夏の試合でも見ておくか」そうしましょう。」

織斑先生と篝に見放された山田先生哀れ。

数分経ち爆煙に消えた一夏の映像が映し出されているモニターを見ている篝の悲痛の声が聞こえてきた。

「大丈夫だよ篝。一夏の鬪志（炎）は、消えてない。」

「「～？」」

行き成りモニターを見ていないはずの紅兎の声が聞こえ振り向いた。

「もう終わったのか？」

「ええ御陰様で最適化まで終わらせましたよ。」

「山田君は?」

「無理やり俺のスペースに合わせようとしてあそこで伸びています。

」

織斑先生が紅兎の指差した方向を見ると長いすに紅兎の制服だらう物が掛けられ寝ていた。

「ほり簫見て、」

紅兎の言われるままモニターに田を移す簫の田に最初の時と違つIS・・・一夏の姿が現れた。

確かに純白だが、最初の工業的な凹凸は、消え滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な何処か中世の鎧を思わせるザインへと変わっている。

そこに一夏がブレードを眺めつぶやいた。

『俺は、世界最高の姉さんを持ったよ・・・俺も、家族を守る』

『あなた何を言って』

『取り合えずは、千冬姉の名前を教えるわー。』

話に着いて行けないオルコットは、ビッグトを一夏に飛ばしたが、一夏の光るブレードにことごとく両断され慣性のまま一夏の横を通り過ぎて、爆ぜた。一夏は、オルコットの懷に飛び込み下段から上段への逆袈裟払いを放つが・・・その斬撃が当たる直前に決着を告

げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者 セシリ亞・オルコット』

戦っていた二人は、みつともないくらいポカーンと口を開けて同じような顔をしている。

そして詰みかけていたギャラリーもピチットで見ていた筈も同じ顔をしていた。

織斑先生は「やれやれ」と言ひ顔で紅兎は、腹を抱えて声は、出さずに笑っていた。笑い涙が出るくらい。

クラス代表決定戦！（後書き）

原作通り一夏に負けてもらいました。
紅兎にオルコットのフラグ必要ないし（笑）

紅鬼の戦い（前書き）

やつと紅鬼の専用機が出せる。

紅鬼の戦い

一夏の代表決定戦の決着が着き、一夏がピットに戻つて來た。

「持ち上げるだけ持ち上げてこの結果か馬鹿者！・・・まあ良い次は、白井お前だ。相手は、此方で準備してある。」

「がんばってこいな紅鬼！」

「言われるまでも無い。暁初陣だ。」

一次移行が終わっている暁は、紅鬼の首に羽型の紅色のネックレスになつていていたが紅鬼の声に反応し一瞬紅い輝き姿が変わつていた。

『紅蓮』といつても良い程に鮮やかな色の西洋甲冑（全身装甲）流線型のよつに滑らかなラインそして一番目を引いたのは、2翼の紅い翼。

まるで紅鬼の炎を象つたように揺らめく紅。

「さて・・・」

ピットに備え付けられているカタパルトに足を固定し

「白井紅鬼・・暁出るー。」

紅い鳥は、空へ羽ばたいた。

ピットに居た一夏は、思った。

「（俺も言おうかな・・・かつこいいし。）」

カタパルトから打ち出され空に舞つた紅兎は、先生が用意してくれた相手を見つけると同じ高度で止まり挨拶をする。

「白井紅兎です。初陣ですが、宜しくお願ひします。」

相手は、一学年で見た事の無い人だった。相手の特徴として水色の髪・気の抜けた顔。乗っている機体は、『デュノア社製『ラファール・リヴァイブ』安定性・汎用性に優れ豊富な後付武装が特徴的な機体だ。

「2年の更識楯無よ。よろしくね」

相手の素性が分かりお互いに握手し開始の合図を待つ。

『一年白井紅兎対二年更識楯無・・・試合開始』

ビィー――

試合開始の合図が鳴ると動じに紅兎のセンサーに警告音が危険を知らせると同時に横に避けた。

「あら、反応速度速いわねお姉さん嬉しくなつちゃうな」

試合開始と同時に先輩の手には、銃が握られ銃口から煙が出ていた。

「手加減無ですか・・・」

「手加減も何もよけられるんだから大丈夫よ ほらほら」

先輩は、撃ちながら楽しそうにお喋りしてくれる。

「ちつ・・・ヤリ辛い!」

自分の手に持つランス（中距離）間合いから放されている事に気づいている分焦る事無く冷静に状況判断をしていく。

そして、紅兎は、あることに気がついた。

「（中距離から離れる程・・・遠くなる程狙いが難になってる…）
そうかなら!」

相手は、遠距離になれないと踏み・・・一瞬紅兎の手元が光ると巨大なライフル銃（遠距用）が現れ出すと同時に先輩は、避けだした。中距離に使用と接近していく。

「（よし狙い通り!）ビット1~5後ろに回れ6~10左右に別れ各個射撃用意・・・」

先輩が中距離に入ると・・・

「もうそんな大物じゃあ役に立たないでしょ

」

「そうでもないですよ。一斉射撃GO!」

先輩が紅兎の言葉を理解した瞬間・・・終了のブザーが鳴り響いた。

『試合終了両者エンプティー・・・引き分け』

そう、紅兎がビットを使い攻撃したと同時に先輩も弾丸を発射していたらしく同時にエネルギー切れを起こしたのだ。

試合後先輩が聞いてきた。

「白井君なんで能力使わなかつたの？使ってたら勝てたのに？」

「そうこの試合に紅兎は、まったく能力を使わず戦つたのだ。

「先輩こそ何で自分の機体で来なかつたんですか？」

「――? 何のことかな?」

紅兎がいった事を笑顔で聞き返してきた。

「先輩の戦い方見て気づきました。中距離の時鋭い程的確な射撃だったにもかかわらず、距離が開くほど戸惑いと照準が甘くなつていたので・・・先輩は、基本中距離専門、例えば俺のランスと同じ獲物が得意と判断しました。」

「ふう〜ん・・・すごいね良くわかりました〜で白井君は、なんですか？」

「本気で来ていない相手に本気を出すと思いますか？」

「わたしは、本気だつたよ」

「じゃあ、その話は聞きました。次に専用機で来たら俺も本気で相手しますよ。」

先輩と話していると、スピーカーから織斑先生の声が流れた。

『お前達、試合が終わつたんだ！早く戻つて来んか！！』

「じゃあ、先輩お相手有り難うございました。」

「楽しかったよ。それと気軽に楯無いでいいよ」

了解 · · · 更識先輩

一
固いよ～！

先輩の反応に笑いながら、ピットに戻ると・・・

• • • • • • • • • • • • • • • • • •

一夏が膝を抱え部屋の隅で暗くなつていた。

「うわっ！？・・・どうしたんだ！」

「実わな」

一夏は、ピットに戻つて来た直後織斑先生にだめだしを喰らい更に、紅兎の試合で上級生と互角の戦いの映像を見て落ち込んだらしいと篠が教えてくれた。

そして、もう一人長椅子で寝ていた山田先生は、紅兎の顔を見るなり赤面し、悶えていた。

紅兎の疑問に織斑先生が答えてくれた。

「白井、お前が気絶した山田君に服を掛けやつたよな？」

「はい。山田先生スカートでしたから。」

「やはりな。山田君は、男に態勢がまったく無くてな。優しくして貰つた事も無いんだ・・・」

「つまり・・・？」

「いや、私の口から言つのは、野暮だな。」

「？」

「まあ良い、お前達アリーナの鍵を閉めるぞ早く帰れ！篠ノ之は、山田君を部屋まで連れて帰つてくれ。流石にその状態だとあれだ。」

「分かりました。」

紅兎の戦い（後書き）

小説を読む限り居ないので、山田先生にフラグ立ててみました。

樋無先輩と紅兎の関係は、悪友です。

一夏に樋無フラグ立てさせる予定です。

紅兎に簪フラグ予定です。

あくまで予定です。

心の変化（前書き）

原作とオリジナル

心の変化

サアアアアアアア・・・・・

シャワーノズルから熱めのお湯が噴出す。水滴は、肌に当たっては、弾けまたボディラインをなぞるように流れしていく。白人にしては、珍しくバランスの取れた体とそこから生まれる流線美は、ちょっとしたセシリアの自慢だ。しゅっと伸びた脚は、艶めかしくもシユタイリッシュで、そこらのアイドルには、引けを取らないどころか勝つているくらいである。

胸は、同じ年の白人女性に比べると幾分慎ましやかであるが、それが全身のシルエットラインを整えていく要因があるので本人としては、複雑な心境らしい。

しかしそれは、白人女性と限定すればの話であって、日本人女性と比較すれば充分どころか大きい位だ。

その胸にシャワーを浴びながらセシリアは、物思いに耽っていた。

(今日の試合)

どうしていきなり一夏のシールドエネルギーがゼロになったのかは、未だにわからない。

けれど、あの最後の一撃が当たつていたり、どうなつていたかは、わからない。

いつだつて勝利への確信と向上への要求を抱き続けていたセシリアにとつて、この困惑は、ひどく落ち着かないものだ。

「わたくしが勝つたのに・・・」

けれど腑に落ちない。なんだかスッキリしない。

「織斑・・・一夏・・・」

その畠前を口にしてみると。不思議と、胸が熱くなるが自分でもわかる。

どうしようも無くドキドキとしてセシリアは、そつと自分の唇を撫でてみる。

水滴に濡れた形のいい唇は、触れられる事を望んでいたかのようになに不思議な興奮を生み出した。

「・・・・・・・・」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

「（なんだらかの）気持ちよさ。」

意識すると途端に胸をこゝぱこにする、この感情は・・・

・・・・・知りたい。

その正体を。その向こう側にあるものを。

・・・・・知りたい。一夏のことを。

「・・・・・・・・」

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

一方その頃・・白井の部屋

学生に宛がわれたその一室の中から聞こえる内容を聞き今日の試合での話をじょじょと来て、いた一夏と篠がドアの前で固まっていた。

「し〜くん・・・かたいね・・・もう少し・・・そつ・・・もと貯持いけぬやうな〜・・・

「あつ・・・はあ・・・はあ・・・」

「ん・・・はあ・・・はあ・・・」

「上手だね・・・本音」

「うれしへ 初めてだつたけど・・・痛くな〜?」

「気持け良こよ。」

ドアの前で固まっていた篠と一夏が再起動すると向処から持つてき
たか篠の手に竹刀が握られており・・・

「篠まわか・・・

「止めるなー 夏・・・

勢い良く白井達の部屋のドアが開放され簞が怒鳴り入ってきた。

「学生寮で何たる破廉恥な！」

「……そ、うだぞ紅鬼！」

凄い剣幕で入ってきた簞と一夏は、とまつた。

「どうしたんだ簞に一夏？」

紅鬼は、ベットにつづ伏せで寝ておりその上にまだがる形でマッサージ（指圧）をしている。こうけいだった。

「マッサージ上手いな本音。」

「えへへ」

「ふるふる・・・・・

「「紛らわしい声を出すなーー。」」

用事を済ませ、何事も無く帰ろうとする一人の襟首を掴み

「所で君らさて・・・ノックもせずになに勝手に人の部屋に来てほざいてんの？」

「さうだよー・・・不法侵入だよー。犯罪だよー。」

「「わあ、遺言あるかな?」」

「「「めんなさい……」」

紅兎と本音の説教が数時間行われ帰された。

余談だが、呪文のように・・・「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」と唱え震えていた一夏と篠が寮の廊下で寮長（織斑先生）が発見された。

心の変化（後書き）

紅兎に一夏が逆らえなくするためのフラグです。

クラス代表おめでとうへ。(前書き)

クラス代表は、原作通り進めたいと思います。

クラス代表おめでとうへ

翌日のSHR

あり得ない事が起きていた。

「では、一年一組代表は、織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

山田先生は、嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がる中一人暗い顔をしているのは、一夏だけである。

「先生質問です！」

「はい、織斑君」

「俺昨日の試合に負けたんですが。それに紅鬼の方が良いとおもいます。」

「それは -」

「それは、わたくしが辞退したからですわ！」

がたんと立ち上がり、腰に手を当て妙にテンションが高く・・・何時もか・・・

オルコットは、意氣揚々と話しお出した。

「まあ確かに、勝負は、あなたの負けでしたが、しかしそれは、考えてみれば当然の事。わたくしセシリア・オルコットが相手だった

のですから。それは、しかたのないことですわ。それで、まあ、わたくしも大人気なく怒つたことを反省しまして”一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。

「はあ！」

「煩いぞ敗者は、勝者に従え！」

オルコットの説明に納得いかない一夏が反対しようとしたが織斑先生の的を得た言葉でうなだれ大人しくなった。更に先生の言葉が続

「織斑が言つた白井の事だが、代表出場の時まだ居なかつたので、却下だ。それに、訓練機と言え学園生徒最強と引き分けた奴をクラス代表にしたら周りの指揮に影響しかねん！」

— . . ? . ! !

ええええええええええええええええ！？」

織班先生のとんでも発言に教室が揺れた。

「ああそれと、白井これがお前の適正検査の結果だ。」

先生のポケットから封筒が紅兎に手渡された。

がさがさ

紅兎は、手渡された封筒の口を切り中から紙を通りだし確認した。

『以下の者の IIS 適性検査は、以下の通りである・・・白井紅兎
適正レベル・・・S・・・』

「あの〜適正レベルSって何ですか?」

「わたくしより上・・・」

・
オルコシトのつぶやきが聞こえてきたが無視。織斑先生に聞くと・・・

「やはりな、國家代表を狙えるだけの技量があると言つ事だ。これ
でSHRは、終わりにする。一現目の準備をするよ!」

昼食堂にて

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクト
な人間が IIS 操縦を教えて差し上げればそれは、もうみるみるうちに
成長を遂げ・・・」

バン!

と昼食の乗る机を叩く音が響く。立ち上がったのは、筈だ。

「あいにくだが、一夏の教官は、足りている。私が、直接頼まれた
からな!」

この様子にいち早く危険を察した本音は、被害が出る前に退散。

「あら、ランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何か」とつかしから
?』

「ランクは、関係ない！頼まれたのは、私だ！」

人が食べているときにせやんせやんと吼えられはつきり言つて食事の邪魔である。

「おい」

貴様ら！」

「何ですか…ひいっ！」

纂とオルコットの後ろから声を掛けられ言い返すと後ろを向くと修羅が居た。

お前ら・・・。」**リリ**がどのような場所かわかつて騒いでいるのか？

オルバッハが口答えをしむるとする。

「可笑しい」と言つてないよな・・・人様の食事を妨害してわかってるよな?」

紅兎の周りが陽炎のように揺りめく恐怖で頭を下げてあやまつてきた。

「謝る方向が違う！俺でなく食堂を利用する生徒教職員に頭をさげろ！一夏もお前がさつさと決めないからこうなる！一人に指示してもらえわかつたな！！」

卷之三

この様子を、離れた席で見つめる生徒が一人・・・

「あの人ガ姉さんと引き分けた・・・白井・・・紅兎」

クラス代表おめでとうへ（後書き）

なぞの女子生徒・・・気づいている人いるよね？

着地・・・いいえ墜落ですか。（前書き）

時期合ひてるかな？

着地・・・いいえ墜落です。

四月の下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部無くなる頃。今日もひつして織斑先生の授業を受けている。

「これよりE.Sの基本的な飛行操縦を実践してもいい。織斑・オルコット・白井。試しに飛んで見せる」

先生に呼ばれ、生徒達の前に進み出る。俺は、歩きながらE.Sを開する。

「白井上出来だ。早くしろ、熟練したE.S操縦者は展開までに一秒もかからないぞ！」

織斑先生の声にせかされて一夏とオルコットが展開する。

E.Sは、一度ファイティングした後、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。オルコットは、左耳のイヤーカフス。

一夏は、右腕のガントレット。どう見ても防具のような・・・俺の

暁は、紅い羽のネックレスだ。

「集中しろ」

一夏は、右手を突き出し、ガントレットを左手で掴む。すると右手首から全身に薄い膜が広がり約0・7秒で展開される。体から光の粒子が解放されるように溢れて再集結するとE.S本体として形成される。

俺のときは、ネックレスに意識を向けるだけで装甲が展開される。まず、体を覆う全身装甲そして非固定ブロックから飛行能力と攻撃

を兼ね揃えた紅い翼が姿を現す。

白井のEHSを見たこと無いのか、じつくじと観察するよつて見て来るオルコットの視線を感じた。

「どうかしたか？」

「いえ、全身装甲が珍しいもので・・・」

「そうか。」

「よし飛べ！」

オルコットと少し放すと織斑先生から指示が出た。

言われて、紅兎とオルコットの行動は、早かった。急上昇し、遙か上空で静止する。一夏も遅れて後に続くがその上昇速度は、二人に比べてかなり遅い。

「何をやっている。スペック上の出力では、暁を除いて白式の方が上だぞ」

地上に居る織斑先生から檄が飛ぶ。

一夏が一人と同じ高度に達した所でオルコットが口を開いた。

「一夏さん、イメージは、所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ。」

「そういわれても・・・な。紅兎は、どおいうイメージなんだ？」

「そうだな。HOPSONSHTAHTやった事有るか?」

「ああ、対戦でな。」

「俺は、その戦闘機お自分に置き換えてやつてこる。」

「それも有りか・・とこひで何で浮いてるんだこれ?」

確かに白式や暁には、翼が有る。が白式は、飛行機と同じ理屈では、飛んでいない大体翼の向き関係なく好きに飛べるのだ。暁除外で。

「説明しても構わんが・・・オルコットにでも聞け。」

オルコットの行動言動を見て推測だが一夏に筹とオルコットは、恋心を抱いていると思つていい。
のでオルコットに譲つた。

「長いですわよ・・反重力翼と流動波干渉の話になりますもの。」

「わかつた。説明わしなくていい」

顔を青くした一夏は、直ぐ断つた。

「そう残念ですわ。ふふつ」

楽しそうに微笑むオルコットに・・・

「なら、一夏にシリオルコットに教えてもらひえ。」

「やつですわね、一夏さん放課後に指導して差し上げますわ。そのとき

いきなり通信回路から篝の声が聞こえてきた。

「こつまでそんなところにいるー早く降りて来い！」

それに続いて織斑先生の指示が飛ぶ。

「織斑・白井・オルコット急降下と完全停止をやって見せる。目標は、地表から100mだ。」

「了解です。でわお先に」

言つてすぐさまオルコットは、地上に向かつ。

「じゃあ、俺も行くかな。」

そして紅鬼も急降下クイックブーストで瞬間加速を使って地上に向かつオルコットを途中で抜き去り50mで完全停止。

オルコットは目標通りに停止。

「紅鬼さん危険すぎますわよー。」

「やつだよーしー君に何か有つたら・・・・。」

「あつー?心配掛けたなごめんな。本音。」

目尻に涙を溜める本音が紅鬼を見ると直ぐに折れたのか本音の頭を

撫であやしていた。

織斑先生も注意しようとしましたが一人の行動を見て止めた。

「ゴンゴン……！」

最後に残っていた一夏も降りてきたようだが……グラウンドに隕石が落ちて来たかの様なクレーターを作り体半分が地面に突き刺さつていた。

「これが犬神家の再現か……」

一夏の状態を専門用語で着陸でなく……墜落と言へ。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グルウンドに穴を開けてどうする？」

「…………すみません」

その後武器展開で、オルコットのスター・ライトMK?の展開の仕方を直せだの近距離の武器出しが遅いのだ、その程度だ。

そいつグラウンドの穴、一夏が放課後までに直してたよ。

そして俺は、と言つと……本音のお守りで軽い注意で終わつた。だが、部屋に帰つてからこつてり本音に絞られたけど……ただい

ま本音の言こなりになつて抱きつかれて動けない・・・今日の出来事終了。

着地・・・いいえ墜落です。（後書き）

次回は、二人目の幼馴染・・・

夜の出来事? (前書き)

ようやくセカンド幼馴染をわざにはこつた!

夜の出会い？

夜。I.S学園の正面ゲートに、小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持つた少女が立っていた。

「ふうん、じーがそうなんだ・・・」

まだ四月の夜風になびく髪は、左右それぞれ高い位置で結んである。肩にかかるかからないかくらいの髪は、金の留め金が良く似合つ艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受け付けてビニルにあるんだっけ？」

上着のポケットから一枚の紙を取り出す。くしゃくしゃになつたそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「本校舎一階総合事務受付・・・って、だからそれどこのよー！」

手に持つた紙を再びポケットにねじ込む。また中でグジグジ音が聞こえたが気にしない。

「自分で探せばいいんだしょ、探せばさあー。」

その頃、本音から解放された紅鬼は、自販機で飲み物を買い外を散歩していると・・・

『本校舎一階総合事務受付・・・って、だからそれどこのあるのよ

『！』

と聞きなれない声がした。 気になつて声の元に行くと鋭角的で有りながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだつた。

『自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ…』

そんな少女に声を掛けた。

「『』の学園は、初めてですか？」

いきなり声を掛けられた少女は、警戒しながらも聞き返してきた。

「あんた、だれよ！」

「失礼、『』の学園の生徒、白井紅兎です。あなたは、見かけた事ありませんから…・・・転校生ですか？」

「男子…・・あなたが『』の…？」

「一番田…・・世間どのように言われているか気には、しませんが…・・せめてここでは、止めて下さいね。それに折角名前を教えた意味を失います。」

「『』めんなさい白井さん。中国代表候補生”鳳・鈴音”ファン・リンイン今日『』に着いたばかりです。」

「そうですか。紅兎でかまわないと。」

「紅兎ね…なら私も鈴で。呼んでいいわよ。」

「解りました。鈴・・・。それでは、案内します。」

鈴音サイド

学園の受付場所を探している時、いきなり声を掛けられ驚いた。

その人は、私の知る男でなく茶色い髪でルビーの様に赤い紅い双眼をしていた。

その人は、警戒しているのが解ったよう名前を教えてくれた。

私が一番田の男と言つとその人は、悲しそうに『名前を教えた意味を失います』といつてはつとした。

相手が名前を教えたにもかかわらず失礼なことを言つてしまつたと直ぐに訂正すると・・・優しい笑みにかわつた。

鈴音 end

少女改め鈴を受付に案内する中色々な話をした。

主に織斑一夏について・・・

「紅兎つて一夏の事知つてる?」

「織斑一夏なら、うちのクラス一組に居るよ。」

「じゃあ、一夏の事教えてくれる?」

「かまわないよ。まずそつだね、今日あつた事から話すね……。
…………」「

「やつぱり変わらないわね。何処か抜けているのよね……。」

「それに、一夏の奴、周りからアピールされているのに……!？」

一夏の周りの話を出した瞬間、鈴から黒いものを感じた。

「鈴……？」

「紅兎……そこ詳しく述べてくれないかな?」

鈴の顔が怖い……顔は、笑っているのに目がY・A・B・A・I
地雷踏んだなこれ……

その後、直ぐに一夏の周りのことを見た。

「ふうん……イギリス代表候補生セシリ亞・オルコット……
篠ノ之箇……いいこと聞いたわ。それにそつ……まだ増える可
能性あるんだ~……」

「ほ……ほら、ここが総合受付場所だ。後は、職委員の指示に従
えば大丈夫とおもつよ。」

「え……有り難う。また会いましょ、紅兎。」

「またな。鈴おやすみ。」

「ねやむ。」

紅兎が寮の部屋に帰ると・・・

「遅いよーー。おりむーの歓迎会おわちやつたよー。」

「あ、それは、すまなかた。転校生の案内してたからな。」

部屋に入るなり詰め寄つて来た。・・

トヽたけ鼻が良いんだがよ！力がある

「君ここに寝る！」

とおに様はなると顔を重ねてきた

七

ん・・チエバ・・えへへうしちゃつた

「何してんだ!?」

一キス

この事が有つた後の本音の甘え方が酷くなつた。教室でも膝に座つてくるし・・・移動するのに上つてくるし・・・山田先生の田がめちやくぢや怖いし・・・織斑先生は、呆れた田で見てくるし・・・

「（俺なにかしたか！？）

夜の出来事? (後書き)

本音の本音なんぢやつて(笑えね~)
これからどうなつてくるか文章中キャラ暴走しちゃつたし・・・

隣のクラスに転校生（前書き）

よつやく一巻半分もた～！

隣のクラスに転校生

鈴を案内し本音の驚き行動の次の日

「織斑君白井君おはよー。ねえ、噂聞いた?」

朝席についてると、入ってきた女子生徒が声を掛けてきた。入学してから数週間が過ぎ男子に馴れてきたのか、良く声を掛けてくる。それでも一夏は、まだ馴れないのか行動が怪しいがな・・・

「転校生? 今の時期に?」

「それなら昨日案内した中国から来た子かな?」

一夏が女子生徒に聞き返すなか紅兎が一夏の傍に行き、昨日案内した子の事を話した。

「それで、昨日の歓迎会来なかつたんだ~白井君の言つ通り、何でも中国の代表候補生なんだつてさ」

紅兎の答えで有つていた。それに一夏は・・・

「ふーん」

と、答えた。そして何故か、オルコットが出てきた。しかも腰に手を当てたポーズで・・・

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

それは、無い。代表生ならまだしも、候補生ぐらいなり危ぶむ事はない。

「EJのクラスに転入していくわけでは、ないのだろう? 驚くほどのことであるまい。」

それまで、窓際の席に居たはずの篠、気がつけば一夏の隣に立っていた。

「どんな奴なんだろ?」

「直ぐ答えると悪い……」

「やうか?」

「む……気になるのか?」

位置かに『直ぐ答えると悪い』と言つた後席に着いた。

「ん? ああ少しちゃ」

「ふん……」

聞かれたことを一夏は、素直に答えると、篠の機嫌を損ねたらしい。一夏の事が一番の篠からすれば、他の女子のことを考えたことに嫉妬しているつよい

そして篠は、話をそりそりと

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか? 来月には、クラス対抗戦があるところのEJ

「そう！ そうですね、一夏さん。 クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょ。 ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが勤めさせていただきますわ。 · · · · ·

紅兎は、席に戻ると本音にお願いされていた。

「し、君お願い有るんだけど··· 聞いてくれるかな~？」

「まず話してみな。俺が出来ることならだがな。」

「え~とね、四組に居るかんちゃん··· 更識 カンザシ 簪私の友達なんだけど··· 専用機を一人で作ってるんだよ··· それでね」

「要するに、その簪つて子の作業を手伝えば良いんだな？」

「うん··· どうかな？」

「··· 分かった放課後開けとくよ。」

「ん ありがと、じゃあ放課後整備室に着てね 「

本音と喋り終わると同時にオルコットが話を振ってきた。

「紅兎さん今日の放課後···

「済まないな、先約が有る。」

「・・・そりですか済みません。」

オルコットが引き下がった後また女子が話し出した。

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ！」

「おうー。」

わいわいと楽しそうな女子に一夏は返事を返した。

「その情報古いよ」

教室の入り口からふと声が聞こえた。昨日の夜聞いた声だ。

「一組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単に優勝できないから」

腕を組み、方膝を立ててドアにもたれていたのは・・

「鈴・・・・?お前、鈴か?」

やはり一夏の知り合いらしい。

「さうよ、中国代表候補生、凰鈴音。今日は、宣戦布告に来たつてわけ」

ふつと小さく笑みを漏らす。トレーデマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

「何格好つけてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

一夏がぶち壊した。

「んなつ・・・! ? なんてこと言つのよ、アンタはー！」

猫のように髪を逆立て一夏を睨むのと動じに紅兎と田中が合った。

「昨日は、助かったわ。ありがとう紅兎。」

「たまたま通りがかつただけだよ。そろそろSHR始まるよ? ?」

「有り難う。また後で来るからね！ 逃げないでよ、一夏ー！」

鈴が教室に戻ると同時に織斑先生が教室に入つて来たにもかかわらず一夏にクラスメイトからの質問集中砲火・・・

「・・・一夏今のは、誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！ ? あの子とは、どうこう関係で

ああ、馬鹿・・・

バシンバシンバシン！――！

「席に着け、馬鹿共」

織斑先生の出席簿が火を噴いた。そして今日も一日一日の訓練と学習が始まる。

隣のクラスに転校生（後書き）

鈴は、織斑先生必殺の理不尽出席簿アタックに回避成功！
他のクラスメート変わらずクリティカルヒット！！

授業は、真面目で（前書き）

少し進んで・・・

授業は、真面目に！

「（やつぎの女子は、何なのだ……一夏とすいぶん親しそうに見えたが……）」

朝の一件が気になつて、篠は、なかなか授業に集中できなくていた。

「（それに一夏まで……）」

まるで幼馴染と再会したかのような反応だった。

「（幼馴染は、私だろー）」

こみ上げてくる怒りをどうにか抑えながら、ちらりと一夏の方をうかがう。昨日の授業での失敗が尾を引いているのか、真面目にノートを取っていた。

「（私は、授業に集中出来ないといふのに、お前は……）」

ますます腹が立つた。少しくらい、私を気にしたらどうだとこいつ気になつて来る。

「…………」

しかし、まあ冷静に考えてみればたいした事でない。
何せ、自分は、一夏と同じ部屋。昨日の夜もそうだった様に一人つきりの時間は、いつでも作れるのだから。

授業中紅兎は、いつもの様に教本の内容と照らし合せながらノートに記していく。

窓際にふと田を向けると、篠が悩むそぶりをしたと思えばいきなりニヤケ顔になつたりどこか楽しげの表情だ。そもそも授業に集中しないと・・・・ほら

「篠ノ介、答へは?」

いきなり先生に当たられ・・・

「は、はこつー?」

素つ頼狂な声を上げ篠は、立ち上がった。失念していたのか今の授業は、山田先生でなく織斑先生の時間だった。

「答へは?」

誰の手助けは、無く

「・・・き、聞いてこませんでした・・・」

バシーン!

と小気味のいい打撃が響いた。

「なら、白井代わりに答えてみる。」

「はい。HISとは、インヒューリット・ストラテスの略で宇宙・・・
・・・・・です。」

「よし。次オルコット」

「……例えばトートに誘つとか。いえ、もつと効果的な……」

どいつもやらオルコットも眞面目に授業を聞いていないらしく簾と同じ運命をたどった。

バシーン！

ふんわりとしたブロンドの髪が、出席簿によつて圧縮された。

昼休みの開口一番簾とオルコットが一夏に文句を言つていた。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「なんでだよ…………」

この一人、午前中だけで山田先生に注意五回、織斑先生に三回叩かれている。

学習しないのだろうか？

織斑先生の前で思考に浸るのは、獰猛な虎を目の前にして体に生肉をふんだんにつけて食べて下せること自殺行為だ。気づかないものだらうか？

一夏は、話を切り上げて簾とオルコットを連れ食堂にむかった。

「さあ、わざと並んで……」

「さあ、行くよ～」

「飽きないな～？」

紅兎の背中にに登りおんぶの状態で食堂に向かつ。

「し～君の背中あつたかく大好き～」

紅兎の背中に顔をうづめ抱きしめる本音。

「はいはい～・・じゃ行きますか。」

一 夏達より少し送れて食堂に向かつ。

二人を見る同級生達からは、どうやら・・・甘えん坊の妹と優しい
お兄ちゃん的な感覚で見られているらしい。朝は、親子らしい。()
朝が弱い本音に食べさせているため

「田井君みたいな、お兄ちゃん欲しいな～」

「布仏さん羨ましいな～」

授業は、真面目！（後書き）

先が長い！！

食堂でも・・・

紅兎が一夏達より遅れて、食堂に着くと・・・

「やつですわーー！夏ちゃん、まさか『ひかり』の方と付き合っていらっしゃるのー？」

「修羅場か？」「

一夏と鈴音との関係についてオルゴンの棘の有る声が聞こえてきた。

とつあえず、紅兎と本音は、食券を購入し渡す。

「はー、お待りおされま。」

「有り難いぞー。今田もつまやつだ。」

紅兎は、ラーメン本音は、きつねうどんを頼んだ。

「しー君早く行こうよ。」

本音にせかされ、一夏達から離れようとしたが・・・遅かった。

「紅兎ー！」

鈴音に見つかり仕方なく相席となつた。

席について食事をとつたら直ぐ逃げようと決め早々に食べ始めた。

ずつずずずすすす

食べてる中、一夏が鈴音との関係を話出した。周りの女子生徒も気になるのか耳を傾けている。

「あー、えっとだな。篠が引っ越していくのが小四の終わりだつただろ？ 鈴が転校して来たのは、小五の頭だよ。で、中の終わりに國に帰ったから、会うのは、一年ちょっとぶりだな。」

すすすすすす

「で、こっちが篠。ほら、前に話した？ 小学校からの幼馴染で、俺の通つてた剣術道場の娘」

鈴音に向か、篠を紹介する。

「ふうん、そうなんだ。」

鈴音は、篠をじろじろと見る。篠も負けじと見返していた。

「初めて。これからよろしくね」

「ああ、じゅうじゅう」

鈴音と篠の間に猫と犬・・・龍と虎が見えた気がした。紅鬼が、食べ終わりスープを飲んでいると話を振られた。

「紅鬼、この学園に来たいまさつ聞いてもいいか？」

紅兎は、手に持つ蓮華を器に戻す。

「まあ、かまわないが。鈴音は、知らなかつたよな。俺もともと、学園都市の生徒なんだよ。」

「学園都市つてなに？」

「鈴音の質問に、本音が答え・・・

「学園都市ていうのは、ね～・・・何だっけ？」

ガタガタ・・・

答えられなかつた。本音に期待していたのか回りの生徒がコケタ。

「気を取り直して、学園都市とは、・・・頭の演算能力を飛躍的向上させ超能力を発現させるための特殊機関。悪く言えば、学生をモルモット（実験動物）にして研究する場所と考えてもらつていいかな。」

「・・・モルモット・・・」

「話を戻すぞ。その学園都市で俺は、学生兼風紀員をしていた。こっちで言つと警察と警備員の中間的な職についていたんだ。でたまたま学園外の警備に当たつて、下見してるとさに誤つてE.Sに触れてしまい・・・ここに居るつて形だな。」

「しき君ご馳走様」

本音が紅兎の方を向いて言うことを不思議に思い器のスープに目を向けると空になっていた。

「本音まさか飲んだ？」

「うん！ 美味しかったよ」

「はー・・・仕方ないな。」

本音と紅兎のやり取りを見ていた少女二人は、呆然としていた。

「篠ノ之さん……あの一人つて……」

「仲が良いと聞いていたが・・・悔れん。」
間接キス／＼＼＼私モ

「う・・羨ましいですわ・・」

そして一夏の方は、

『友達同士なら普通じゃね?』と一人気にする様子なく残りの料理を堪能していた。

食堂でも……（後書き）

むすこ……ヒローライン固定しちゃいたつ。
でもラウラの黒猫と簪と真耶は、捨てがたい一品。かねじ込まないとな。

次回：簪出せるかな？

打鼓狀似（福壽丸）

ルルモヘ 繩紋田螺

打鉄式式

放課後になり、本音との約束通り整備室にきた。IS整備室。各アリーナに隣接する形で存在する場所は、本来一年生からはじまる『整備科』のための設備である。そこには、俺を呼んだ本音ともう一人の女子生徒が居た。

「約束通り来たぞ。」

「し～君紹介するね～私の友達かんちゃんだよ～」

「本音・・・それじゃあ・・・分からない・・・更識・・・簪です。」

更識簪という子は、水色の髪に毛と眼鏡を掛けた大人しそうな印象を受けた。

たぶん一年に居る更識楯無と姉妹なのかな？性格が極端だけど。

「了解だ簪。俺は、知っていると思うが、白井紅兎好きに呼んでくれ。」

「紅兎・・・君」

簪と名前交換を終え、に本題に入つてもらつた。

「IJのIS、名前は？」

「ウチガネーイシキ
打鉄式式」

「で打鉄式式の何処を手伝えば良い？」

「えっとね、各駆動部の反応が悪いんだけど・・・」

本音に言われ、メカニカル・キーボードに陣取り空中投影ディスプレイを凝視すると、ひたすら打ちながら改ざんしていく。

力夕力夕力夕力夕力夕

一
凄い

わざ今まで、本音に手伝つてもらつていて、エラー表示されていたのが、嘘の様に紅鬼が数字の覧列画面を切り替えることに正常稼動していく。

カタカタカタ・・・トン！

紅鬼は、手を休め簪を呼ぶ。

なあ、簪この打鉄の稼動データなんだけど……！？」

紅兎は、作業に気を取られ気がつくと密着するぐら^いい簪の顔が近かつた。

簪も我に返つたのか顔を赤らめたがきちんと聞いていたらしく。答えてくれた。

「ああ、稼動データがないから、俺の暁からデーター移しても良いかなと…」

稼動データーが気になるのか、激しく頭を振る簪に曉を開け、ディスプレイに映るようにコードを繋いでデーターを見てもらっている。

「…………」

「どうかな……使えそつか?」

「凄い…………これって……姉さん……」

データーの画面と映像を見ていく中で簪が何かつぶやいた。

「ああ」のデーターは、初機動のときのデーターだな。あの時は、参った。外見できて、中身が空っぽだったから、その場で急遽OS作ることになつたんだよね……しかも初戦相手に勝てなかつたのがくいだな。」

「え……今なんて?」

「し~君……OS作つたていた?」

普通うに話す紅兎から聞き捨てならない言葉が聞こえた。

「ああ、作つたな。たしか一夏とオルコットが戦つている時だつたな。」

「…………紅兎君」

「し~君」

「打鉄武完成まで宜しくお願ひしますー。」

「かしこまりんでも、まあ宜しく。じゃあ早速だけど、これに記入した部品全部交換して。」

紅兎は、データーチェック中に不良品を書き出していたリストを簪と本音に手渡した。

「え・・・これ全部ー!?」

「もうだよ。とつあえず、全部の不良品を書いたから、交換頼むよ。」

「わかった!」

「私の方も、色々あたって探してみるね~」

「いや、チヨイ待ち!明日の休みを使って心当たり有るから行って来るわ。」

二人がリストを手にして動こうとした瞬間、紅兎から呼び止められた。

「し~君何処行く氣~?」

「学園都市だよ。中途半端なEVAを送ってきたんだ。丁度いいだろ。」

「

「私・・・行つてみたい!」

「私も」

「学園都市に手続きもあるからそつだな。明日の朝08:00に正門出発だ。」

打鉄武術（後書き）

無理やりで済みません！
次回学園都市に行きます。

学園都市（前書き）

今回だけの学園都市

学園都市

朝08：00に正門で待ち合わせをし、暁の製造場所である学園都市に向かっている。

学園都市は、高い外壁に閉ざされておりその一角に検問所が配備されている。

「失礼ですが、許可書を・・・」

紅兎は、警備員に許可書を提示した。

「これわ失礼しました！第6位！…そちらの方は・・・」

「俺の連れだ。一次的なバス発行を頼む。」

「それでは、此方にサイン等お願ひします。」

本音と簪は、警備員の言つとおり書類にサインしていく。

「はい、記入漏れは、ありません。では、このカードをお持ち下さい。お帰りの際にお返し下さい。では、よつこひそ学園都市へ・・・」

紅兎の後に続いてゲートをくぐって行く。

「うわ～」

「これが・・・学園都市・・・」

意外と緑が多く、電信柱なども見あたらない。かなり見渡しがいい。

「ん、あれは、黒と美琴？」

紅兎の目線の先には、常盤台の制服を着た女子生徒がじゅれあって
いるのが見えた。

「それは、わたくしと間接的な接吻を^{ペーゼ}」所望という事ですね！――

「は？」

「では、お姉様からお先にビリビリ わたくしは、その後でじつく・
・」

ゴン――

「イタ――何ですのいきな・・・お兄様！――？」

相変わらず危険な行為に走るとする妹の頭に一発ふりおろした。

「よつ、黒相変わらず苦労してゐる美琴。」

紅兎の後ろから本音たちが聞いてきた。

「ねへ、しへ君その子達と知り合ひなのかな――？」

「紹介するの前に落ち着け黒！」

「もう少し官能させてくださいとも……」

紅兎を見た瞬間飛びついてきた黒を引き離し紹介を始めた。

「まず、俺に引っ付いてた」「いつが、白井黒子……俺の妹だ。で
」「ちが……」

「御坂美琴です。」

「み」「ちやんだね～布仏本音だよ～よろしく～」

「更識……簪です。」

とりあえず紹介が終わった。

「お兄様 今日は、どうかされたのですか？」

「ん・・片倉研究所にな・・・」

「HS関連でしたか。あ、私わこのまま支部に向かいますので。」

「ああ、元気な顔が見れてよっかたよ黒。」

途中で黒達と別れ、片倉研究所に向かつた。

「白井紅兎があたと責任者に会えてくれ。ここにきてとな。」

「はー、しまりへお待ちトセ。」

しばらくして受付の人來て案内してくれた。

「失礼する。」

「私が工三暁の開発者。片倉重三だ。せよひは、どのよひな用件で？」

「片倉さんだつたな。まづ暁をつづいてくれた事には、感謝するが・・・。〇うがまつたくの白紙だつたのは、ビツチツ事かな？」

「ビツクー！」

「更に、製作費用より多くの費用が請求されてるようだが・・・。」

「へへ・・・」

「さて、俺が言いたい事分かつてるよな?」

「へへ」

「片倉と言つ男が殴りかかるが・・・

「燃やすぞ」の悪党が!」

自分の手の平に炎を出し殴りかかつて来た片倉の手をはじくと頭を掴み炎の出ている手を向けた。

「第6位発火能力者をなめるなよー!」

「ひいいー!」

「さて、お前には、二つの選択肢がある。この紙に書かれているものを用意し俺によこすか・・・・それとも、風紀員につかり牢獄で暮らしこそ間から後ろ指を指されのたれ死ぬか!」

片倉と言ひ男は、直ぐに紙に手を伸ばし揃えた。

「簪全部そろつてるか?」

「全部・・・そろつてる。」

「そりゃ、ならそれをコンテナに入れろ。」

「よし。でわ、じゃましたな。」

学園都市外に運ぶための手続きを終わらせ、運送業者に荷物を預け、三人は、帰るために検問所に行きゲートだいぶ過ぎた後さつきのやり取りを聞いてきた。

「紅兎君・・・さつきの片倉・・つて人のこと・・黙つておくの?」

「いや、学園都市理事長から頼まれてたから、びつひじろ牢獄行きは、確定だろ？」「

「じゃ～嘘ついたの～！」

「嘘は、言つてない。風紀員が捕まえないけど、ヘルハウンドが拘束するだらつよ。」

「ヘルハウンド？」

「簡単には言つと特殊武装に身を包んだ、警官隊と思つてくれていいよ。」

その頃

片倉研究所

「あのクソ餓鬼のせいで横流しができなかつたぜでもまあ、これで再開出来るな！」

キヤアアアアア

受付から悲鳴が聞こえ次の瞬間

バン！

「動くな！片倉重二。IS部品横流し経費横領の件で理事長がおまちだ！」

「クソ餓鬼騙しやがったな！？」

拳銃を突きつけた男が一言言つたことで自分が手玉に取られていたことを知った。

「第6位が言つ事は、嘘でわない。その証拠に我々は、風紀員でなくヘルハウンドだからな。」

学園都市（後書き）

片倉重二郎の一話のためのキャラクターです。

紅兎は、風紀員だったためどちらにしろ決まっていたことです。

ある意味予想通り？（前書き）

暴走！－！作者暴走！－！

有る意味予想道理？

学園都市からヒリの部品を取得して、学園の整備室にヒリもって居る。

「本音、スラスターの性能テストするから気をつけ。」

紅兎がスラスターの出力ゲージを上げていく。一から五十まで上げて行く。

「出力・・安定・・」

五十から五まで徐々に上げていく。

「問題ないよ～」

パーツを組み上げ所々でこいつた調整テストをしていく。外見が全て出来上がったところで有る問題点につまずく。武装面だ。

「なあ、簪・・・武装に関してなんだけど・・・荷電粒子砲だつか、あれ俺のバスター・ライフル応用出来ないかな？」

データーを簪に見せるが首を横に振る。

「・・S・E消費率高すぎ・・燃費悪い。」

「だよな。」

「他から持てこれたら簡単なのにな・・・」

本音の一言で解決策につながった。

「他から・・・エネルギー・・・タンク・・・カートリッジ・・・？ そ
うだ！一発一発の弾丸にエネルギーをつめて撃てるようになれば良
いんだ！ナイスだ本音！」

「でも・・・そんな・・・技術無い」

「それなら大丈夫だ。アイツに聞けば問題ない。」

「誰かな？」

「昨日会つたる、御坂美琴。アイツは、電磁関係なら専門家だ！」

紅兎が美琴に電話し、協力を求めるところ快く引き受けてくれた。そし
て技術の応用などを教えてもらい直ぐ製作に移つた。

簪の専用機・打鉄式改の出来上がり。

「スッペック上は、問題ないけど、明日アリーナを貸切ての最終テ
ストをする。」

「ようやく・・・飛べるよ・・・式式。」

「じゃあ私が、生徒会に掛け合つてみるよー」

「ああ頼む。」

「お願ひします。」

そして翌日。本音の言ひ通り、アリーナを一つ貸しきつてくれた。条件として、生徒会立会いの下。

グラウンドの真ん中にスースを着た簪が一人立ち、紅兎は、緊急時に備えEISを展開したまま端に待機している。

「来て・・打鉄式式改」

簪は、右手を軽く突き出す。その中指に、クリスタルの指輪がはめられており、ぱあっと簪の体が光に包まれ、装甲を纏うと同時に浮遊する。打鉄の後継機であり、発展型。最初に見た外見と大分かわった。スカートアーマーは、機動を重視したためウイングスカートを更にシャープに防御型の打鉄に比べかなり紅兎の暁に似ている。特に、肩部のシールドがウイング型スラスターになり打鉄の面影は、薄くなっていた。

簪の展開が終わると同時に、打ち合わせ通りの急浮上・急加速・急降下と武装点検を終わらせていく。

一通り終わらせ、グラウンドに降り展開を解除すると紅兎に駆け寄る。

「紅兎君・・・完成させてくれて・・有り難う//」

「どういたしまして・・かな。」

話している一人の下に立会いをしていた生徒会の人気が歩いてきた。

「姉さん・・・」

「簪おめでとう。・・・紅兎君だつたわね。簪のために有り難う。」

簪は、姉が苦手のかつづむいた。それを紅兎は、背でかばつよつに立つ。

「そんなに、警戒しないでよ。お姉さん泣いちゃうー。」

「・・・紅兎君／／／大丈夫・・・だから。」

「分かつた。」

簪から離れると、姉妹で何か話しだした。

「姉さん・・・私・・・」

「簪・・・えつ・・・・・分かつた・・・・・お姉さんに任せなさい！」

「紅兎君・・これからも宜しく／／／」

簪から離れた姉更識楯無先輩は、ニヤリと笑いアリーナを後にした。

整備室の片付けを済まし、アリーナの施錠をし鍵を職員室に返し自室に戻ると紙が張り付けられていた。

『以下の者1080に移動することと布仏本音・白井紅兎両名は、本日中に新たな部屋に移動すること。 責任者・生徒会長』

「…………何これ？」

寮の部屋に入ると本音は、移動準備のために荷物整理をしていた。

「し～君お帰り～ 早く準備するよ～」

「ああ・・・」

紅兎も移動のため整理していく。
荷物を持って新しくあてがわれた部屋に入ると・・・可笑しな事にベットが4つある。

「なんだ？」

「ほら、し～君 私窓際で良いかな～？」

「ああ、とりあえずドア側に・・・」

「し～君・・・隣空いてるよ～」

「・・・・・」

「・・・・・ウルウル」

子犬のような涙目で訴えかけてくる

「分かつたよ・・・」

見事に折られました。

部屋に物を置くため整理しているとドアがノックされ本音が出るとそこには、ボストンバッグを持つた簪がいた。

「かんちゃん宜しくね~」

「へつー!?」

「し~君かんちゃんも一緒に住むんだよ~」

予想外の出来事にすつとんきょな声がでた。更に本音から、爆弾が投下された。

紅兎の頭の中で『紅兎君これからも宜しく』と言つ簪の言つた意味を理解した。

「かんちゃんのベットは、し~君の隣だよ~」

「なんと無く理解した。宜しくな、簪。」

「宜しく、せ・・紅兎／＼／＼／＼」

有る意味予想道理？（後書き）

無理やりすきる？

だって本音だけリードしそぎてるし、縮めるには、もう一つのベットな、誰の手に？

買い物で・・・（番外編）（前書き）

設定として、クラス代表戦の前。一人で休みに買い物に出かけたときの内容です。

買い物で・・・（番外編）

IHS学園に転入して有る程度の口が経ち買い物に出かけたときの無いようだ。

その日は、本音が生徒会の仕事で朝から一日中居ない日だった。

「そういえば、俺のシャンプーとボディソープ切れてたな。」

買い物置きが無いことを思い出し町に買出しに出かけるとサングラスを掛けた女性が駅の改札付近を行つたりきたりしていた。そんな女性に声を掛けた。

「どうかされましたか？」

「実は・・・」

女性は、ドイツからわざわざ欲しい物があるからと買いに来たは、いいが道に迷つたらしい。

「あの～秋葉原は、どうすればいけますか？」

「あ～、よければ案内しますが？」

「ホントですか！助かります！～」

道案内を買って出ると、両手を握られ上下にブンブンと振られた。

「そうだ。俺の名前は、白井紅兎と言います。好きに呼んでください。」

「はい！紅兎さん。私は、クラリッサ・ハルフォーフです。クラリッサとお願いします。」

秋葉原行きのチケットを購入して、再び電車に乗った。

「すいません・・・チケット代を払わせてしました・・・」

「いえ、気にしないでください。でも、驚きましたよ、クラリッサさんしっかりしてそうなのに予定金額下回るなんて（苦笑）」

クラリッサさんは、頭に欲しい物を買つことしか考えていなかつたらしく、航空チケットの他に購入金額しか持ち合わせていなかつたのだ。

「そろそろ着きますね。でわ、行きましょう。」

「あつ、はい！」

秋葉原についてからは、と忙つと・・・

「凄い！！！街中でゴスロリー・メイド服・・・うわ～〇ぬひ、あーそれに○キュア凄いスゴイ～！」

子供のよつよほじゅうしゃいでの。

「（有る意味凄いよクラリッサさんも・・・）

「あつ紅兎さんあそび行ってみたい！」

「え・・・？」

クラリッサさんが指さしたのは、【メイド喫茶】である。学友が興奮しながら話していたが・・・来る羽田になるとわ・・・

「お帰りなさいませー！」主人様！」

「お帰りなさいませー！お嬢様！」

「つわー！カワイイー本当にいいんだー！？」「真良いですかー！」

「お先に、お席に案内いたしますー！」

メイド喫茶に入り、かなりテンションが高くなつたクラリッサさんを見て少し引いたのは、内緒だ！

「あ～楽しけ～・・・あつ・・・」めんなさいーー！」

「氣にしてないで良こですよ。せんぱるドイツから来たんだし、思い出作りですよ。」

そう・・・しつこく言つがクラリッサは、そんなにお金を持ち合わせていないのだ。

「目的忘れるといひでした！」

「（おじー）で、買いたい物って？」

「それわ・・・」

「それわ？」

「同人誌です！」

「同人誌・・・分かりました、トラの○ナカアードイトに行きますね。（青髪ピアスに聞いてて正解か・・）」

「はい！」

国際空港ロビー

「本当に済みませんでした！たりない分まで出してもらつて！」

「欲しい物が手に入つて良かつたですね。」

結局、同人誌を購入するさい、消費税を計算していなく紅毛払い。その日だけで、福沢さんが一枚お空に飛んでいった。

「あの・・・これ、もし困った事が有つたら連絡くださいー！それは、今日大変お世話になりました！有り難うございました！」

「気をつけてクラリッサさん良い旅をー！」

「有り難うー紅兎さん祝福が有らん事をー！」

最後にクラリッサさんから渡された名刺を見ると・・・

『ドイツ軍 シュヴァルツェ・ハーゼ クラリッサ・ハルフォーフ
大尉』

と電話番号が書かれていた。

「何かとんでもない知り合いつつくちまつたな・・・黒ウサギ隊ね
」

クラリッサさんが乗つてゐるであるう飛行機を見送り、もらつた名刺を財布にしまい、当初の予定通りシャンプーとボディーソープを購入して学園に帰つた。

「時間のかかる買い物になつたな。ま、その分楽しかつたがな。」

寮に帰り、シャワーを浴び終わると同時に本音がかえつて來た。

「お帰り本音。」

「ただい・・・むう違つ匂こがする～一...」

ドンだけ鼻が良いんだよー

「し〜君ー。」

「はー。」

「一緒に寝よひねえー。」

「拒否権は・・・

「一緒にねのやー。」

「・・・・・はー。」

翌日、ドイツに戻れたか気になり、一応確認で連絡を入れて有る。

買い物で・・・（番外編）（後書き）

一応、ラウラフラグのための布石です。

クラス対抗戦前の日（前書き）

さて、クラス対抗戦の内容に入りたいとおもいます。

クラス対抗戦前の日

簪の専用機に毎日の放課後を費やし、気がつくと一夏と鈴音の仲が悪くなっていた。

仲直りをするかと思えば、日増しに悪くなつて行き、有る日の放課後、久しぶりにヨウ訓練をしようとアリーナに行くと鈴音と一夏ラバーズがなにやら揉めていた。

「あたしは、関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね!」

「ほほほ、どうこう関係かじつくり聞きたいものだな……」

「盗人猛々しことは、またここのことですわね!」

どうやらオルコットまで、切れたらしい。しかも簪のぴくぴくと引きつった口元が離れた所に居る紅鬼でも分かるくらい……恐ろしい……

しかも一夏は、俺に気づいたらしく田で助けを求めてきた。

「……（頼む助けてくれー）」

「……（ヤダ自分で蒔いた種だら）」

「……（ヤレヤレ）」

「……（今日の晩御飯おーれ）」

「・・・（分かつた！頼む！…）」

実際は、田で話をしていた訳でわなく、プライベートチャンネルを奇跡的に使った会話である。

とりあえず契約成立と囁く形で首を縦に振り、紅兎は、一夏達の傍まで行き、話に入った。

「鈴音何で今田、このアリーナに来てるんだ？」

「つて？紅兎じゃない！私がアリーナ使つたらだめなわけ！」

「今日は、駄目だな。」

「何でよー。」

「使用書に書いた有つたはずだが。今日の第二アリーナは、一年一組の対抗戦訓練で貸切のはずだ。一組は、第一アリーナだよ。敵情視察と妨害行動中止と朝に連絡されているはずだが。」

「え！」

「ま、そういうことだ。何か一夏に言いたい事があるなら校舎内か寮内で話してくれ。今日の妨害行動は、田をつぶつておくから早めに出なさい。」

「はい・・・一夏一寮に帰つたら覚えときなさい！」

鈴音は、職員に見つかる前に第一アリーナに向かつて出て行つた。

「すまん助かつたよ紅鬼。」

「それは、かまわん。籌、オルコット感情的になりすぎだ。もつと冷静になれ。乗せられっぱなしだつたら。」

「「ひひ」めんなさい。」

「どうがー。」

「オルコット、一夏の事で頭が回らないのは、分かったが良く周りを見て落ち着いて行動しろ。」

「申し訳ありませんでした。」

「一夏お前もだ。言いたいことがあるならハッキリと言葉にして発言じろ。周囲に流されすぎだー。」

「はい・。。」

寮に帰った後、一夏の部屋の前で鈴音と一夏がまた喧嘩したらしいく声が響いていた。

「馬鹿とは何よ馬鹿とはーー」の朴念仁ー間抜け！アホ！馬鹿は、アンタでしょー。」

「「ひひめんなさい。貧乳」

その発言は、アウト言いすぎだわ。

紅兎がそつ思つて一夏を注意しに行ひつかると・・・

ドガン！

一夏は、鈴音の強烈な蹴りを喰らひ部屋に吹き飛ばされた。

「言つたわね・・・。言つてはならぬことを、言つたわねーちよ
つとは、手加減してあげようと思つたけど、どうやら死にたいら
いわね。　全力で潰してあげるー。」

バン！

勢い良くドアが閉められ鈴音と田代が合い・・・

「紅兎！　付き合こなさいー。」

「はー・・・部屋に来い。」

紅兎達の部屋にて・・・

「もつー！　聞いてるー。」

「聞いてるよ。一夏が鈴音の約束を間違えた覚え方したんだろ。」

「おりむーも馬鹿だねー少し考えればわかるのにー」

「やうでしょーーーーといふであんた達何してんの？』

今の状態を答えると。鈴音は、椅子に座り愚痴を話している。そして、紅兎が自分のベットの上に座り話を聞いている。ここまでは、良い。問題は、本音が紅兎に膝枕をしてもらっているながら寝ており。簪は、ちょこんと寄り添つように紅兎の横を陣取つていて。

「何時もの事だ。気にするな・・・」

「一夏より凄いわね・・・紅兎は、一人の事どお思ひの?」
バカ

鈴音にとって紅兎は、一夏と違ひ相手の事を考えてると思い聞いてみた。

「そうだね・・・今は、まだ友達以上恋人未満かな、告白受けてないし、してないし。増えるかも知れないし、減るかも知れないしね。」

「あんた・・・凄いわね・・・もし、二人とも告白したら?」

「高校出てから、一夫多妻制の国に移り住むかな?優柔不断なこんな俺を好きになつて着いて来てくれたなら幸せにしてやりたいしな。」

「

紅兎の発言に、本音と簪は、頬を赤らめ嬉しそうにしている。

「・・・一夏にこれだけの甲斐性が有れば良かつたんだけど・・・一夫多妻制の国ね~」

時間は、瞬く間に過ぎ……寮の門限になり鈴音は、自分の部屋に戻つていった。

そして、誰も居ないはずの廊下で……

「HJ委員会に一夫多妻制度を承認させなくちゃねーお姉さん頑張っちゃん。簪ちゃんの為にも!まつてね!!」

薄暗い廊下に静かに一人の声笑い声が響いていた。

クラス対抗戦前の日（後書き）

紅鬼の性格と作者の気持ちを踏まえ、書いてみました。
やつすやとゆうナデ・・・後悔は、していない。

クラス対抗戦（前書き）

ビバ！原作破壊！！

クラス対抗戦

試合当日、第一アリーナ第一試合。

天のめぐり合わせか、二組代表 凰鈴音 対 一組代表 織斑一夏
だった。

噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは、全席満員。それどころか通路まで立つて見ている生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかつた生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。そして紅兎は、と言つと・・・

「山田先生、俺ここに居ていいいんですか？」

「織斑先生から作業協力の一環で許可が下りているから大丈夫です。」

そう。今、紅兎が居るのは、管制室。普通・・教員など限られた者しか入れない場所だつた。

「で、織斑先生・・俺に何をしろと?」

「私だけでは、エンドデーターの収集が間に合わん。」

「山田先生も居るじゃないですか!」

「白井お前も知つてゐるだらう。山田君は、書記関係ならまだしも機械処理になると・・・」

暁の〇〇時を思い出し・・・

「あ～・・・理解しました。」

「では、頼んだぞ。」

紅兎と織斑先生の話に入れない山田先生は、部屋の隅で暗くなっていた。
そんな中、一夏と鈴音の『甲龍』^{シヨンロン}が試合開始の時を静かに待つている。

管制室では、提示されているデーターを見ている。

「へ～甲龍の非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}が特徴的ですね。」

「そうだオルコットと同様で第三世代機だからな。」

「ところで・・・いつまで落ち込んでるんですか?」

「私なんて・・私なんて・・・」

織斑先生が目線で何とかしようと告げてきた。

「山田先生、の入れてくれた珈琲が飲みたいな。」

ピック!

「はい!入れてきます!」

「・・・・・・」

「・・・・そりそろ開始の合図が出ますし作業しますか。」

「ああ。」

『それでは、両者規定の位置まで移動して下さい。』

アナウンスに促されて一夏と鈴音は、空中で向かい合つ。その距離は、五メートル。どうやら一夏と鈴音は、オープン・チャンネル開放回線で話しているらしく筒抜けである。

「一夏、今謝るなら少しぐらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ。」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い！」

そんな事を聞いていると・・・

「織斑先生、学園から一キロ離れた位置に所属不明なHS反応！」

「ちつ・・・こんな時に一白井出られるな！」

「了解！行つてきます！」

学園外に現れたHSを処理するために織斑先生の許可を貰い、アリーナの外に出ると曉を展開し空に舞い上がった。

紅兎は、学園上空に上がり所属不明HSのもとに行き・・・
「此方は、HS学園。貴方は、許可無く私有地に入ろうとしている。直ちに引き返しなさい。」

「・・・・・」

ビショーン！

「ちつ・・敵意有りと判断し、これより武力行使に移る！」

アリーナでは、一夏達の試合が開始され、離れた位置では、紅鬼と所属不明機との戦いが始まった。

クラス対抗戦（後書き）

原作破壊！！

原作ってなに？美味しいの？

クラス対抗戦決着（前書き）

まず、一夏対鈴音 そして 紅兎と不明機

クラス対抗戦決着

アリーナから、紅兎が出て行き不明機に接触している頃。アリーナでは、一夏と鈴音の試合がはじまった。

『それでは、両者、試合を開始して下さい。』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に一夏と鈴音は、動いた。

ガギーン!!

瞬時に展開された一夏の武器、雪片式型^{クロス・グリッド・ターン}が物理的な衝撃ではじき返される。一夏は、オルコットに習っていた三次元躍動旋回をじうにかこなして、鈴音を正面に捉えた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鈴音が言葉を切ると鈴音が手にしている異形の青龍刀と呼ぶには、かけ離れた形状で上下に刀をつけた物をバトンのように回して、それを自由に角度を変え一夏を切り刻む。

「（くわ・・・）のままじゃあ消耗戦になるだけだ。一度距離を取つて）」

一夏が距離をとりつとつと後ろに下がるつとすると・・・

「甘いー。」

鈴音の肩アーマーがバカツとスライドして開くと中心に有る球体が光つた瞬間一夏は、目に見えない衝撃で吹き飛ばされた。

その頃

紅兎は、所属不明機と交戦していた。

攻撃をすると不明機は、攻撃を避けた後、直ぐ反撃に転じてくる。しかもその方法が無茶苦茶だ。

でたらめに長い腕をブンブンと振り回して接近していく。コマのように、しかもたちが悪く高速回転状態でビーム砲まだ撃つてくる。

「チツ・・・接近するとあの腕が邪魔だな、かと言つて射撃だと避けられる。それに、あの動き無人機の可能性が高いな。だったら、本気出しても問題ねえ！」

紅兎は、手に銀色のランスを持ち突きの構えをとる。端から見るとただの突きの構えにしか見えないが、時たまキンキンと何か叩く音が聞こえ出し次の瞬間、銀色だったランスが赤くなつて燃えたぎつていく。

「さあ、耐えられるかな・・・イグニッショングースト瞬間加速発動！」

紅兎の能力により高熱を纏つたランスが瞬間加速によつて一筋の光になり不明機に吸い込まれるように突き刺さり、逃げようともがくが胴体の真ん中を突かれたためか抵抗虚しく動かなくなつた。

「ふう・・・任務完了だな。とりあえず、織斑先生に報告だな。」

管制室にいる織斑先生に連絡を取ると、不明機を回収しアリーナに戻れと指示を受け岐路に着いた。

管制室

ISの展開を解除し、管制室に居る織斑先生の下に行き報告をする。

「白井紅兎、不明機より攻撃を受けたため交戦になり海上にて、これを撃墜。回収し、迎えに来た教職員に事後処理を任せ戻りました。」

織斑先生は、紅兎の報告を聞いた後・・・

「この件について緘口令とする。以後話さないよう!」

「了解しました。」

「(う)苦労だった。無事で何よりだ。」

「紅兎君お疲れ様です。珈琲入れましたが飲みますか?」

報告が終わりねぎらいの言葉と同時に山田先生が温かいコーヒーを差し出してくれた。

「有り難ひござります。・・・ふ・・・美味しいです。」

一口飲むと、珈琲の香りが疲れた体を癒し、さつきまでの戦意が嘘のように消え、水分が体に染み渡る気がした。

結果発表

一夏対鈴音の勝負は、鈴音の作戦勝ちだつたらしい。なんでも、一夏が鈴音の斬撃から逃げるため、距離をとつたが、衝撃砲により一夏のE・Sが削られていき活路を見出そうと単一仕様を発動させた一夏が瞬間加速で攻撃したが、鈴音がそれを避け衝撃砲を連続発射し一夏は、ボロボロにせりあたらしく。

* 篇説明より

そして、アリーナの控え室では、一夏が鈴音に謝つてゐるのが目撃された。

その夜

鈴音が部屋に来て仲直りし、一夏の勘違いのままとつたと言つている。

「それいして、」「私の酢豚食べてくれる?」を「私が酢豚おいつてあげる」と勘違いしていたとわな・・・有る意味す」にな。一夏の奴・・・・・・

「でしょ！一夏の鈍感何とかならないかしら！」

「でもでも～おりむ～が、鈍感じやなくなつたら～ただの邪ま（アコシマ）になるよつな～？」

「・・・それもいやね。」

「・・・それなら・・・鈍感の・・・方が・・・まし。」

「あんた達が羨ましいわねまつたく！」

「「えへへへへへへ」」

クラス対抗戦決着（後書き）

めんどくせこので纏めました！

対抗戦後（前書き）

他の方々が書かれている小説を読んで、更新遅れました！

多々あるかも！

宜しく！

対抗戦後

学園の地下五十メートル。そこは、レベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したEISは、すぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。

それから一時間、千冬は、何度も紅兎に提出された戦闘映像を見ている。

「…………」

室内は、薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイみ割り込みでウインドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらつてドアが開くと、真耶は、何時もよりも幾分きびきびした動作で入室した。

「あのEISの解析結果が出ましたよ。」

「ああ、どうだつた？」

「はい。あれは - - - 無人機です。」

世界中で開発が進むノートローラル・スタンド・アローンの、そのまだ完成していない技術。リモート・コントロール操作と独立稼働。そのどちらか、あるいは、両方の技術があの謎のISに使われている。

その事実は、すぐさま学園関係者全員に緘口令が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたかは、不明です。白井君の最後の一撃で機能中枢が溶けきっていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアは、どうだつた?」

「・・・それが、登録されていないコアでした。」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に真耶は、怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか?」

「いや、ない。今は、まだ - - - な」

そう言って千冬は、またディスプレイの映像に視線を戻す。

それは、教師の顔では、なく、戦士の顔に近かつた。

かつて世界最高位の座にあつた、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

紅鬼側

「お帰り～」

「お帰りなさい。」

紅鬼が部屋に帰ると本音と簪の声が出迎えてくれる。

「ただいま。」

「早く食堂に行こ～」

「ああ、行こうか。」

「はい。」

「簪、今日もたぬき蕎麦かな？」

「うん・・好きだから。」

「やうか、俺も食べてみるかな?..」

「うそー。」

一方一夏側

「遅いぞ一夏……」

鈴音に負かされ、保険室から解放されて、部屋に戻つて来るなり開口一番この言葉。

この幼馴染は、鬼か…………！

寮の廊下を歩く紅鬼達にそんなやり取りが聞こえていた。

対抗戦後（後書き）

次回・・・二人の転校生出せるかな？

貴公アヒム銀の黒ウサギ（前書き）

ハカラ――――――!

貴公子と白銀の黒ウサギ

「やつぱりハヅキ製がいいなあ」

「え？ そう？ ハヅキのつてデザインだけって感じしない？」

「そのデザインが良いの！」

「私は、性能的に見てミュー・レイのがいいかな。特にスマーズモーデル」

「あー、あれねー。モノは、いいけど高いじゃん」

月曜の朝、クラスの女子がわいわいと賑やかに談笑していた。手にカタログを持つてあれやこれやと意見を交換している。

「そういうえば、白井君や織斑君のIISスーシツでどこのやつなの？ 見たこと無い型だけど」

「俺のは、ドイツ軍御用達の所に特注で作ってもらつたからな。デザインより性能・身体防御中心にしてもらつている。」

「心配しそぎだよ。」

「IISは、生身の人間を殺せる兵器だからな。何が起につても可笑しくないだろ？」

紅兎の発言に楽しそうに話していた女子生徒が静まりかえった。

「……織斑君のは？」

「あー……男のスースが無いから、どつかのラボが作つたらし
いよ。もとは、イングリッシュ社のストレートアームモデルつて聞い
てるよ。」

と話すと予鈴が鳴り先生が入つて來た。

「では、連絡事項は、以上だ。ところで気になつてゐるのだが、こ
の空氣は、なんだ？」

織斑先生が何時もと違つ教室の空氣を感じ取つた。

「まあ、大方。白井だろ？。」

「確かにそうですね。今朝、ISスースが話題になり、デザインよ
り性能・身体防御と言つたところ、女子生徒から、心配しそぎと言
われて……ISは、生身の人間を殺せる兵器だからな。何が起こ
つても可笑しくないだろ？」と言つたらこの空氣になりました。」

紅兎が言つ正論に織斑先生がうなづく。

「確かにＩＳは、競技用と言われファッショングループ感覚が増えてきている。が忘れるな。白井が言つた通りＩＳは、生身の人間に向ければ凶器でしかない。その事を忘れるな！」

「「はい！」」

「では、山田先生ホームルームを」

「は、はい！」

連絡事項とさつきまでの空気が嘘の様に晴れ織斑先生が山田先生にバトンタッチをする。

ちょうど紅兎の発言を書いていたのかあわてて姿勢を正す。

「ええとですね、今日は、なんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

「え・・・・・・」

「「「ええええええええええええええええつー！？」」」

いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。この三度の飯より噂好きの十代乙女、その情報網を抜け転校生が現れたんだ。驚きもあるるわな。

「失礼します。」

「・・・・・・・・」

クラスに入つて来た一人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

止まる理由なんて転校生の一人が、俺達と同じ男ならなおさらだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では、不慣れなことも多いかと思いますが、皆さん宜しくお願ひします。」

「お・・・男?」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「

印象としては、誇張でわなくクラスに溶け込め直ぐ友達が出来ると思つた。

「きや・・・」

「はい?」

「(耳栓しと)」^{ヒツ}。

紅兎が耳栓した瞬間!

「あやあああああああああ つー」

クラスの中心を起点に歓喜の叫びと囁つソニッ クウェーブが起つた。紅兎は、耳栓で難を乗り越えたが直撃を喰らつた一夏は、顔を青くし悶えていた。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！紅兎君は、守ってくれそうだけど守つてあげたくなる系の
！」

「地球上に生まれて良かつた~~~~！」

最後の子、規模がでかいな！

「あー騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに織斑先生がぼやく。十代女子の反応が鬱陶しいんだ
ろうな。

『愁傷様です。

「みんな静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

もう一人の転校生は、輝くような銀髪・・白に近いそれを腰近くま
で長くおろしている。綺麗でわざとらしいが、整えてる分だけでわ無いよう
だ。しかも見覚えの有る眼帯をしてえいた。

そして開いているほうの右目は、俺と同じ紅色ただその色は、温度
が限りなく零度にちかい。

「・・・・・」

当の本人は、未だに口を開かず、腕組をした状態で教室の女子達を
下らなそうに見ていた。

「挨拶しづか、ラウラ」

「はい、教官」

やはり、クラリッサさんと同じ軍関係者なんだな。織斑先生を教官と呼ぶてことは、軍部の教官をしていたんだろうな。

「！」では、そう呼ぶな。もう私は、教官では、ないし此処では、お前も一般生徒だ。私のことは、織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるとピッシと完璧な敬礼をした。

「ラウラ・ボーデヴィッシュだ」

「…………」

クラスメートも流石に沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた眞の様に口を開かしてし、少し経つと再び口を開いた。

「教官、先ほど白井と言つていましたが……」

「……！」いつだ。」

ラウラの予想外の質問に一瞬遅れたが、俺を指され俺は、前に進み出た。

「他の生徒と違う様だな。」

「まあな。ファッショソと勘違いしている様だからな。どんなに競技用EISと言つても兵器だからな。」

「ふつお前となら話が出来そうだ。」

「そりが。宜しくなボーナスイツヒ。」

「ラウラで良い。」

「了解だラウラ。俺も紅鬼で良い。」

「紅鬼了解した。」

席に戻つた直後事は、起つた。

「！ 貴様が！」

「ラウラが一夏の方につかつかと歩いていくと・・・

バシンツ！」

「・・・・・・」

「うへ。」

いきなり、ラウラに殴られていた。

「私は、認めない！ 貴様があの人の弟であるなど！ 認めるものか！」「

「いきなり何しやがるー。」

「ふん・・・・・・」

すたすたと空いている席（紅鬼の横）に座った。

「宜しくラウフ。」

「ああ、宜しく紅鬼。」

一夏に対する態度と紅鬼に対する態度の違いにクラスメートは、口をポツカリ空けている。

「あー・・・ゴホンゴホン！ では、HRを終わる。各自は、すぐ着替えて第一グランドに集合。今日は、一組と合図でHR模擬戦闘を行う。解散！」

解散と同時に男子である俺達は、外に出ようとすると・・・

「おい織斑、ディノアの面倒を見てやれ。田井は、出来るだけボーディヴィッヒの・・・」

「ラウフの事ですね。傍にいられる様にしますよ。」

「頼んだぞ。」

貴公子と白銀の黒ウサギ（後書き）

こんな處です。キャラ崩壊しちゃつたけどー！

馬鹿と一夏は、使つたが。(前編)

のをひりこへへーーー！

馬鹿と一夏は、使いよう。

織斑先生に頼まれ「」とされた後急いで移動する。

「一夏済まない！先に行かせてもらひーー！」

一夏がシャルルの手を取り教室を出た瞬間、紅兎は、脱兎の如く一夏から離れ一人アリーナ更衣室に着替えのため向かう。

「あつこら待て！・・・俺達を置いて行くな！」

「はつあ！一夏と違つてあんな群衆の中突っ切れるか！逝くなら一人で逝きやがれ！」

そんな事を走りながら話していいると・・・

「ああ！転校生発見！」

「しかも白井君と織斑君と一緒によー！」

H.R.が終わり、早速各学年各クラスから情報先取のための尖兵が駆け出してきている。

波にのまれたら最後質問攻めのあげく授業に遅刻、織斑先生の特別カリキュラムが待つているのだ。絶対ぐらいたく無い！

「仕方ない・・・避け！一夏ミサイル！－！」

紅兎は、一夏の後ろに回りこみ女子の群れに一夏を蹴りで吹き飛ばしシャルルを脇に抱え込み更衣室に向かつて猛ダッシュした。途中、

一夏の声が聞こえて聞こえてきたが無視。

「ちよつと、織斑君大丈夫なの？」

「知らん！」テュノアは、織斑先生の強烈な一発を脳天に喰らいたいのか！ それなら一夏同様に放りこむが？」

遠ざかる揉みくちゃにされている一夏を一度振り向き直ぐ決断した。

「シャルルで良いよ。行こう！ 田井君……」

「俺も紅兎と呼んでくれ。一夏よお前の命の輝き無駄にしない！ 安心して逝け……」

「君の冥福を祈るよ！」

「裏切りもの…………！」

早々に更衣室に着くとシャルルを降ろし、着替えに移るが……

「わあっ……？」

紅兎が服一枚脱いだとこりでシャルルが驚いた。

「どうした？」

「何でも無い！着替えるよ？あつち向いてて……ね？」

「かまわんが早く着替えろよ。俺は、下に着込んでいるからいいが。

」

紅兎は、服を全部脱ぐと下にじっかりとT-SURFを着ていた。

「僕も、着替え終わったよ！」

ビリヤー、シャルルも着込んで来ていたのか、すぐに着替え終わっていた。

「よしねら、第一グランデに行へやー！」

「うそー。」

グランドに着くと一度、女子が出てきていた。

「ビリヤー、間に合つた様だな・・・。」

「もうだね・・・。」

グランドに出で話していると、織斑先生が話してきた。

「白井、織斑は、どうした？」

「女子生徒の魔の手に捕まりました。」

「そりが・・・ばか者が・・・。」

織斑先生が離れると・・・

「たまにま、一夏ミサイル役立つな。」

「結構ひどいけどね・・・。」

「見捨てた、シャルルが言つた。」

「あは。」

「遅いー。」

予鈴が鳴り五分遅れで一夏がグランドに出できた。

「つっつー指導有り難うござります・・・」「放課後の模擬訓練覚えとけよー！」

バーン！

「俺に勝てるなら、覚えといてやるよ。笑」

「済みませんでした！…」

一夏と紅兎のアイコンが終わり、列に戻ると・・・

「ずいぶんゆづくりでしたわね」

何の因果か一夏の隣は、オルコットだった。四月の代表決定戦以降、何かと一夏を構つてゐる。

「スーツを着るだけで、もうじてこんなに時間がかかるのかしら？」

そして横には、鈴音。二人目の幼馴染らしき。

それに紅兎は早かってたわね

そこで、俺に振るのか！

「一夏と違つて着込んでるからな。それに・・・（男性と女性の身体的特徴の違いも出てくるだらうな。）

「なんなんですか？」

「しそう君それ以上は、メツだよ／＼／＼／＼」

「[流石にそれ以上は、言わないさ。]」

オル「シトと鈴音は、普通に話しへ・・・本音と俺は、アイコンタクトで話しているため、織斑先生に田をつけられずにいる。

馬鹿と一夏は、使つたよ。（後編）

なんだかんだで、一巻頭辺りかな？

馬鹿の結末（前書き）

授業は、眞面目にしまじょい。

馬鹿の結末

遅れて来た一夏を言葉で攻める女子一人は、失念していた。
今は、休憩時間でなく授業中なのだ。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？ 一夏、アンタなんでそう馬鹿なの！？」

それも・・・織斑先生の・・・

「安心しろ。バカは、私の田の前にも一名いる。」

ギギギギギッ・・・と、きしむブリキの音で首を動かすオルコット
と鈴音。

視線の先では、もちろん鬼が待ち構えていた。

当実習の鬼教官は、どなたもウエルカム。

年齢国籍性別は、問いません。

さあ・・・地獄の幕開けです。

バシーン！！ × 2

今日も青空の下で出席簿アタックの犠牲者（自業自得）になる。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する。」

「「はい！」

一組と二組の合同練習なので人数は、いつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っていた。

「くうつ・・・・・。何かといふと直ぐにポンポンと人の頭を・・・

「・・・一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・」

ズキズキと叩かれた場所が痛むのか、オルコットと鈴音は、ちょっと涙目になりながら頭を押さえている。

「何となく何考えているかわかるわよ！」

「どうやら、一夏がいらない事を考へたのか、鈴音に蹴られてこる。その辺にじないとまた、田を付けられるよ!」

「今日は、戦闘を実演してもおう。ちゅうび活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。 - 凪！ オルコット！」

遅かつたか
・
・
・。

「な、なぜわたくしまで…？」

完全などばつちつを受けたオルコット。諦める。理屈は、たぶん…あつと通用しない。

「専用機持ちは、直ぐに始められるからだ。いいから前に出の」

「だからつづいてわたくしが…・・・」

「一夏のせいなのになんでアタシが…・・・」

出てきた一人に小声で話しかけた。チラッと一夏の方を見て、口元が一ヤケタ。

「お前が少しばかりの氣を出せ。アイツにこいつ見せられぬか？」

「やはらこには、イギリス代表候補生、わたくしセシリ亞・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せない機会よね！専用機持ちの一・

やる気ゲージがマックス近くまで急上昇。なんとも乗せられやすい…
・大丈夫か！？代表候補生！！」

「それで、相手は、どちらに？　わたくしは、鈴さんとの勝負でも

かまいませんが

「ふふん。」JETの台詞。返り討ちよ

「慌てるなバカども。対戦相手は」

「キイイイイイン・・・・・・

空気を裂くよつた音は、まさかー？

「暁！」

紅兎は、瞬時にHSを纏いフル加速で落ちてくる物体（HS）の元に行き捕まると減速しながら、織斑先生横に降り立つ。

「山田先生・・・イグニッショソ使つとい間違つてますよ。」

「済みません済みません済みません済みません！――――――」

山田先生を降ろした後、自分の列に戻り何も無かつた様にしたかつたが・・・

「し～君・・・・」

そもそも行かなかつた。本音から若干黒いモノが溢れてきている。

「・・・本音、今日一緒に寝よつか？」

本音の耳元でそう囁くと・・・

「うん！――」

満面の笑みで返してくれた。

実戦演習は、オルコット・鈴音VS山田先生

結果は、いうまでもなく・・・山田先生に誘導されられ、一人が絡
まつた瞬間グレネードを打ち込まれ勝者は、山田先生となつた。

馬鹿の結末（後書き）

学生の頃、授業をサボりまくっていた野鳥獸です。
でも・・・赤点取った事ないです。保健以外で・・・汗）

考え方一つで

山田先生が勝利し・・・専用機持ちと代表候補生のブランド株価がギュンギュン落ちていつている音を聞いた気がする。しかも無情にもストップ安は、無いらしい。

結局オルコットと鈴音のいがみ合には、一組二組の女子のくすぐす笑いが起こるまで続いた。

「さて、これで諸君にも工学園教員の実力は、理解できただろう。以降は、敬意を持つて接するようだ。」

パンパンと手を叩いて織斑先生がみんなの意識を切り替える。

「専用機持ちは、織斑・オルコット・デュノア・ボーデヴィッヒ・鳳だな。では、八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは、専用機持ちがやること。白井は、ボーデヴィッヒのサポートだいいな? では、別れる。」

織斑先生が言い終わるや否や、一夏とシャルルに一気に二クラス分の女子が詰め寄っている。

紅兎は、ラウラの傍に行き話している。朝の件があるためか、本音など個人的付き合いが有る者が、来ているだけとなつた。

「ラウラ、宜しく頼むな。」

「それは、かまわないが……なぜ私が教えなければならぬ！」

「ラウラの言う事も分かるが、卵から孵つたばかりの雛は飛べないだろ。なら、親が飛び方を教えてやらないとな？」

「むう・・私が親か・・そういう捕らえ方もあるな。」

「し〜君、例え話終わつた〜」

「何だ「マイツ」はー?」

紅兎がラウラと話しているヒューラッと出てきた本音に驚いた。

「ラウラ紹介しどこいつ。寮で同室の布仏本音だ。」

「布仏本音だよ〜」

三人で話していると・・

「一の馬鹿者共が・・・。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番は、さつき言つた通り。次にもたつくようなら今田は、ISを背負つてグランド百周させるからなー！」

鶴の一聲と言つやつかな。わらわら一夏達に群がつていた女子生徒達が蜘蛛の子を散らす様に各グループに分かれて行つた。

「じゃあ、ラウラ始めるか。」

「ああ。Jのチームは、日本人が多いから打鉄で訓練をしようと思つ。意見有る奴は、居ないか？・・・居ない様だな。紅鬼頼んだ。」

「

「了解だ。」

チームから離れ、先生達の元に行く。

「織斑先生、ラウラチームは、打鉄を使用します。」

「分かつた。ボーデヴィッシュヒヒ上手くやれている様だな。これからも頼むぞ。」

「出来る限り。では、打鉄をお借ります。」

打鉄の乗った専用カートを押してチームの元に戻り訓練開始となつた。

「では、まずは布仏からやつてみる。」

「はいー。」

「Hに乗るとときは、背中を預けるように座る感じでいい。装甲に手をかけるとやつやすござ。後は、システムが勝手に最適化する。」

本音がHに乗り込みきれない形であるが、一步一歩確実に動かしていく。

「よし。良いだろう、方膝を着くよう元の座った体制にしたら、次に交代する。」

こっちのチームと違つて一夏達は、立つたまま女子生徒が降りてしまつたらしく専用機持ちが抱きかかえ運んでいる。
そして、このチームでも・・・

「白井君御免！みんなの意見だからー。」

立つたままで降りやがりました・・・でも関係無いけどね！

「IJのままじや乗れないよ～（笑）」

「そりか乗れないか・・・仕方ない。」

紅兎は、ISを展開せずに打鉄に近寄ると、タッチパネル式のキーボードを出し立つてている状態から、座つた状態に態勢を変えさせた。

「えー？」

「俺は、馬鹿と一緒にしないで欲しいな。次、座らずに降りたら、次の人には、登つて操作してもらつから。」

「紅兎の言う通りだな。私が最初に言つた様に座つた状態にしてから交代しなければ・・・教官程では、無いがグランド10周してもううか。」

ラウラの発言により、大人しく授業が進められていく。

「では、午前の実習は、ここまでだ。午後は、今日使つた訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは、訓練機と自機の両方を見るよ。では、解散！」

時間にかなりの余裕を持たせ、全員の起動テストを終えた。織斑先生は、連絡事項を伝えると山田先生と一緒にさつさと引き上げた。格納庫に IIS を運び入れた後、横を見ると息が上がった一夏がいる。

「なに、息切てるんだ？」

「はあ・・はあ・・あー・・あんなに重いとは・・・」

「まさか人力で運んだのか！？」

「それ以外に方法があるのか？」

「はあ・・・IIS 部分展開で、運べばいいだろ。」

「忘れてた！――！」

「お前・・馬鹿だろ。」

「ぐつ・・・昼飯じつするんだ？」

「ん・・・本音かラウラと一緒だな。」

紅兎の口からラウラの名前を聞いた瞬間嫌な顔をした。

「何で、あんな奴と・・・」

「話して分かつたが、筋を通せば話の分かる奴だぞ。それと、一つ分かつたが、一夏、昔囚われた事で織斑先生の一回制覇がダメになつたらしいな。それを恨んでらしいぞ今朝の件は、こつちでも、ラウラに色々話していい方向に向ける努力は、するが・・・お前の悪い癖だ。無駄な挑発をして事を荒立てるなよ。」

「・・・分かつた善処する。恩にきる。」

考え方一つで（後書き）

次回は、こんな感じかな的な整備内容を書かたいとおもいます。ネタとして、バーチャルシステムアートワークします。

バーチャルシステム アンチ（前書き）

PV10万記念で1月1日に上げようと思ひますが以下からお願ひします。

簪と一日デート

本音と一日デート

ラウラと一日デート

真耶と一日デート

の中から3~1日までの締め切りで、お願ひします。

VTシステム アンチ

午前中の起動訓練を終え、昼食タイムとなり今、食堂に居るのだが

一人の女子生徒の周りだけ人気が無い。

俺は、食券を購入し料理をオーダーすると、ものの数分で出てきたそれを持ち、空白地帯の中心に向かつた。

「ラウラ、隣の席いいかな？」

「紅鬼か、構わない。」

俺は、静かに食べるラウラの隣に座り、料理を置くと俺の持つて来た料理に目を見開いた。

「紅鬼それは・・・」

「ショニッツェル
Schnitzelだけ?」

「祖国の料理まで有るとわな・・・」

「他にも確か、レーシュテーク
Rehsteak ショバーゲル
イネフラー
bratenも有つたはずだぞ。」

「ホントか!-!」

まず仲良くなるには、祖国料理から話を広げる為にドイツ料理をラウラと食べている。

可なり、心を許してくれたようで、次の整備訓練に手伝わしてくれると公言してくれた。

午後の整備訓練になり、午前中言われた通り各班、JとJに格納庫に集合した。

「では、これより午後の整備訓練を開始する。各班で使用したISを整備調整しin。専用機持ちは、自分のISも平行しながら整備調整するように。疑問点が有るなら素直に聞きに来い。意地を張つて機体を壊すな。いいな！」

「「「はい……」「」

織斑先生の号令によつて、作業が開始された。

紅兎は、まずラウラの下に行き、OSの調整等ラウラがデジタル画面を見ながら指示していく。

「よし。後は、最下層だけが・・・ラウラ、此処に出でている「VTS system」の表示が有るんだが分かるか?」

紅兎は、OSに巧妙に隠されたデーターを見つけ開いてしまつた。

「VTS system・・・まさか、紅兎。いつたん作業中止だ。教官を連れてくる。」

紅兎に作業中止を言つたらウラは、織斑先生の下に向かつて行き・・

・織斑先生が他のスタッフを連れ戻つて來た。

「紅兎、そのデータ見せてみろー。」

紅兎は、言われた通りのデータを画面に映しだした。

「……………」これは、間違いないな。ボーデヴィッシュ直ぐにデーターをこのJISBに移し替えるからJTに関するデーターを全て削除しろ。それと、この事は、他言無用だ。白井も分かつたな。」

「はいー。」

「了解ー。」

その後、再度一からOSデーターを見直し不備が無いことを確認し、紅兎のOS調整を手伝つて貰つてゐる。

「紅兎、このOS可なり複雑だな。何処の研究所が作成したのだ?」

ヒューリックと山田先生が現れると……

「白井君のOSデーター」の学園に来るまで真っ白でしたよ。」

「……………では、このOSは、誰が?」

「ボーデヴィッシュさんの目の前にいる白井君ですよ。少し私も手伝

おつとしたんですけど……スピードに着いて行けず気絶しちゃいましたけど。」

山田先生の言葉で、紅兎をこれでもかと言ひ位に田を見開き見てくる。

「確かに、時間が無かつたから、思いつく限りで作成したから……実質今日が最終調整なんだよ。」

手を休ませず、機動出力調整・射撃照準の調整・武器出力・S・E出力を修正していき、自分の愛機が終わり今度は、訓練機の調整に取り掛かりあつと言ひまに午後の授業が終了してしまった。

「……即興製作で……あれだけ動かせて……紅兎！……私の部隊に来ないか！」

「卒業したら考査してもいいよ。」

教室に戻る時勧誘された。

放課後、ラウラに荷物を部屋に運び入れるのを手伝い気づいた事がある。

「此処……俺達の部屋だと……」

「同室か、宜しく頼むぞ。」

「おお・・・」

VTシステム アンチ（後書き）

次回更に、ラウラキヤラ崩壊します。
備考ですが・・・

Schnitzel^{イエーガ・シュニッツェル} 牛肉を叩いて薄くし、衣をつけて揚げカツレツ風にしたモノです。

きのこソースをかけた狩人風^{イエーガー}と考へて下さい。

かとは・・・（前書き）

思ついたので、同じ日に投稿します。愚だ愚だでごめんね～！！

力とは・・・

放課後、寮の部屋にラウラの荷物を運びいれた後・・・

「ただいま〜」

「ただいま・・戻りました・・・。」

「お帰り、本音・簪。」

「同室になつた。ラウラ・ボーテヴィッヒだ。」

「一回田だね、布仏本音だよー」

「更識簪・・です。」

「改めて、白井紅兎だ。宜しくラウラ。」

「ああ。本音と簪だな。宜しく。」

自己紹介を済ました後直ぐに、本音が話しを振つてきた。

「ボーテヴィッヒさんの噂よつ・・話しやすいです。」

「ボーテヴィッヒさんの噂よつ・・話しやすいです。」

朝の一件で、怖いイメージを持っていた簪でさえ、実際話すとそれでもなく話しやすいらしい。

紅兎は、始めからそんな偏見なしに接していたため、実感が無い。

「し～君は、仲良くなる力があるよね～」

本音のアルキー・ワードにラウラが食いついた。

「今、力と言つたが相手を捻じ伏せる強さが力では、無いのか！？」

「どうやら、強さに偏見が有るらしいな・・

「せうだな、ラウラの言ひ強さも力の一つだな。」

「力の一つだと！？では、まだ力があるのか？」

此処から、力とは、何かと言ひはなしに入り、ラウラ性格崩壊の一歩となる。

「そうだな。まず本音は、周りを和ませる力がある。」

「そうだね、本音がいると喧嘩が・・起こり辛いよね。私には、無い・・かな。」

「簪だって、力が有るぞ。一人で自分の専用機作ろうとした努力しだだる。」

「それ言つたら、紅兎君だって、製作を手伝ってくれた優しい力があるよ。」

話を黙つて、聞いていたラウラも口を開いた。

「で・・では、教官の力は、なんだ？」

「織斑先生の力ね……そうだな。一回目の優勝を捨てる勇気と言う力と、期待より弟を思つ親愛の力かな。」

「……捨てる勇気……親愛の力……」

「さりに言つてしまえば、相手を許す心の強（広）さと言つ力が織斑先生にあるんだと思つぞ。」

「では、織斑……弟は、」

「一夏か……そうだな。友達を心配する力・友達を信用する力だな。」

「し～君、まだ有るよ～女心に鈍感な力（笑）」

「悪い言い方だがな。良い言い方で人を引き寄せる力だな。それに、謝るのも力だな。」

「なぜ謝るのが力なのだ！」

「自分の過ちに気付き非を認めるそして、相手に自分から謝（思いを伝える）る力だな。それに、まだ見ない力も有るかも知れない一緒に見つけて行けばいいだろ。一人より二人。それに、此処に俺達が居る。一緒に探すのを手伝ってくれるさ。そudadろ？」

「当たりまえだよ～」

「私も・・・探す力になりたい！」

「 そ、う、か、色々な力があるのだな。ならその力私も使つ・・使える様になつて見せる！」

夕食を食べるために入りで食堂に向かつと一度、一夏達も食事をしていった。

「（こ）れは、チャンスだな。（ラウラ、やつきの力で、一夏に謝つて來い。」

「そ、う・・だ、な。自分に非を認め謝つてくれる。紅兎・・・」

袖口を掴むと子犬の様な目で訴えてくる。

「分かつてゐる。行こうか。」

ラウラの頭を一撫でし、一夏達の下に行く・・・

「一夏、お疲れさん。」

「お疲れ紅兎・・後ろに居るのは・・・ボーデヴィッシュ・・・」

一夏と一緒に夕食を食べていた篠達の田線が突き刺さる。

「まあ、猪きりたつな。ラウラ。」

紅兎が、立ち上がるうとする一夏ラヴァーズを押さえ、ラウラが話せるように横にずれた。

「…………」

「…………朝……殴つて済まなかつた！！ 紅兎に教えてもらつた。教官は、二回目の優勝より、家族で有る。お前を取つた勇氣と・・本当にー！済まなかつた！！！」

ラウラが自分から謝つたことが、信じられないものを見るかの様に目をぱちぱちとしながら、呆気に取られている。そして一番最初に戻つたのが一夏だ。

「有り難う。謝罪してくれて。俺も、ボーデヴィッヒを許すよ。」

一夏が許すと言つた瞬間ラウラは、今日見た中で一番良い顔をした。「じゃ、本音達の下に戻るか。」

「ああー。」

翌日朝のSHRで改めて自己紹介をし直した。

「ドイツ軍 IJS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』から來ましたラウラ・ボーデヴィッヒです。昨日は、済みませんでした。宜しくお願いします。紅兎これからも宜しくー。」

「ああ。宜しく。」

一日の内にラウラを変わらせた紅兎と変わったラウラに驚きを隠せず、出席簿を床に落とす織斑先生だった。それ以降ラウラもクラスでちょっと固いが話せる様になった。

力とは・・・（後書き）

個人対抗戦・・・不参加無しの予定！！

「カウチソーラー」モード（蓄電池）

パソコンの不具合でかなり遅れて済みません！
今年も宜しく！

ラウリヒー邸ート

学園も冬休みを向かえ、学園から帰省した生徒が多く静まりかえっている。

紅兎も帰省した生徒の一人だ。

「今年も後少しで、終わりか……」

紅兎は、リビングで今年の終わりに耽つていると……

ピンポン！

チャイムが鳴り、妹の黒子が応対しているのか声が聞こえて来た。

「・・・お兄様・・・はい・・・ラ・・・どうぞ」

リビングのドアが開き、黒子が入つて來たが、何か機嫌が悪い……

「お兄様・・・お客人ですよ・・・誰なんですかー？」

「ん・・・いらっしゃい。」

黒子の後に入つて來たのは、黒を基調にし白銀の髪が映え、淡い白い花をあしらつた振袖姿のラウラだった。

「紅兎・・・クラリッサから聞いたぞ。何でも、初詣に行くと願い事が叶う行事があるらしいな。私をそれに連れて行け！・・・それと・・・似合つか？」

「・・・・あの同人馬鹿の入れ知恵か。ラウラの振袖も見れたし・・・
今日は、よしとするか。ラウラに似合つて綺麗だと思うぞ。」

二人だけの甘い空間に・・・

「お兄様！その方は、誰ですかーー！」

妹の黒子の存在を忘れていた。

「ドイツ代表候補生で相部屋相手のラウラ・ボーデヴィッツヒだ。」

「気軽にラウラと呼んでもらつて、かまわないぞ。なんと言つても、私は、紅兎の妻だからなー!夫の妹は、私の妹になるからなー!」

黒子の前で、爆弾発言をすると・・・

「・・・夫・・・妻・・・どう言う事ですか、お兄様・・?」

「黒……顔が怖いぞ……ラウラは、そうだな。妻候補と考えるべきかな……？」

「紅鬼そんなことより、着替えた行くぞ！」

「そうだな。」

黒子からドス黒い何かに覆われて行くなか、ラウラに急かされて着

替える。

そして、着替え終わり家を出てドアを閉めると・・・家のなかから・・・

「お兄様！帰つて来たら全て話してもうりますわ！――――――」

有る意味死刑宣告が言い渡された。

お参りに行く途中に知り合ひに会つこと無く石でできた階段を上つて行くと目的地に着いた。

「これが、初詣と言つものか・・・祭りと違つのだな。」

「まあ・・な。ラウラ。」

紅兎は、ラウラに手を差し出し・・・

「／＼／＼いいものだな／＼／」

紅兎の手に乗せる様にラウラは、手を重ねた。

「既に、願い事が叶つてしまつたな／＼／

「何か言つたか？」

ボソッとラウラのつぶやいた言葉は、紅兎に届いていなかつたらしく、ラウラは、ホッと安堵した。

人の列に並び、紅鬼達の番になり賽銭を入れた後、鈴を鳴らし、手を叩き目を瞑りお祈りをした後・・・

「紅鬼あそこで、皆が紙を開いているが、何だ？」

ラウラの目に止まつたのは、境内の一角で売つてあるお御籤だった。

「お御籤だね。一年の運勢を占つものだよ。」

「やつてみたいー！」

「了解だ。」

境内に居る巫女服を着た女性に、代金を払い八角形の筒を振り出された番号伝えると、自分のお御籤が手渡された。

「紅鬼、これは、なんと書いてあるのだ？」

ラウラが開いたお御籤には、中吉と書かれていた。

「ちゅうきうちつて読むんだ。お御籤には、大体・・大吉・中吉・小吉・吉・末吉・凶・大凶と分けられている。が、地方の神社では、並び順が違うがな。ラウラが引いたのは、この神社では、上から一番目だね。俺のは・・・俺も中吉だな。」

紅鬼が説明し終わるとラウラは、自分のお御籤を熱心に読んでいる。見ていて、面白い。

ラウラの目が一点に集中した後・・・ニヘーと凄い笑顔になつた。一方、紅鬼のお御籤の内容は、恋愛面以外平凡そのものだった。それ以外一番目を引いた言葉も有つた。

「「恋愛・・女難の相有り」・・・今年もか・・・それに、何だ?
?世界に田を向けるべしつて? ?」

ラウラは、自分のを読み終わったのか、紅兎の方に意識がもつどてきた。

「紅兎、何故木に結び付けているのだ?」

「ん~・・・運気が向上しますようにつと言われ・・・」

説明を聞くと、ラウラの行動は、早かつた。
我先にと木の枝に結び付けた。

その後、参拝を終え、売店の甘酒を購入し飲みながら家に向かった。
途中、甘酒に酔ったラウラを背負い家に着いたが・・・

「お兄様・・・お話を聞かせていただけますこと! - .」

黒子の事を忘れていた。

「勘弁してくれよ・・・」

「お兄様! まだお話は、終わっていませんわー!」

紅鬼の部屋に寝かされているラウラは、とても幸せそつた寝息を立てていた。

「ウツヒー フトート（後書き）

次回は、山田先生が本作を進めます。

眞耶ヒ | フトマー ? (前書き)

集計最後のなかなか本作と絡みが無いヒローアインキャラ！

真耶と山田テート？

とある休日。紅兎は、駅前で待ち合わせをしていた。

「駅前で待ち合わせとは、そんなに恥ずかしいものかな？」

回想

放課後、山田先生に呼び止められこんな事を言われた。

「あのー・白井君、明日の休みお暇ですか！」

「ええ。明日は、何も予定が入っていないなかつたはずですが。」

紅兎が暇と聞き山田先生の顔に笑みがこぼれた。

「ならー明日は、私の買い物に付き合つて下さー。」

「かまいませんよ。」

「では、学園前の駅で朝10時に待ち合わせでー。」

「寮からでは、なく駅ですね。」

「はい！寮からだと恥ずかしいですし・・（他の人が着いてきそうですから・・・）」

「では、朝10時に学園前の駅でお待ちしています。」

回想終わり

紅兎は、腕時計を見る。

「9時30分か・・・早く来すぎたかな。」

それから、10分後・・・

「紅兎さん、お早うござりますーお早いですねー!?」

「遅刻するわけにも・・・」

「どうかしました?」

時計から山田先生が居るほうに話しながら田を向けると・・・何時
ものダボダボの服に変わりないが、俗に言う「スロリを着ていた・・・

「山・・・真耶さん、その服で行くんですか・・・?」

「はいー私のお気に入りですー。」

「そうですか、可愛らしいですよ。」

「／＼／＼／＼」

ゴスロリを着た山田先生コト真耶さんは、大人に見えなく同年代か、
年下に見えてくる。

格好だけならまだしも・・・行動までもが子供化してる。

「紅鬼さん。映画行きましょ」

「行こうか。」

「はい」

今上映されている映画は、二種類の作品。A級ホラー・ラブロマ
ンス系

ガアアアアアアアアアアアアアア

ザシユツ！！！

「首が首が！？！？！？！？」

涙を流しながら紅鬼にしがみ付く真耶さん。掴まれた腕に当たる柔らかく弾力のある物を押さえつけられ放映の三時間映画に集中できなかつた。

卷之三

「いえ。珍しい真耶さんが見れて良かつたですよ。」

「 / / / / / あの・・・ 紅鬼さん / / / 休んで / / 行きません」

真耶さんが指摘したのは、HOT（ピンク色）

シャワーを交互に使い、バスローブで体を包んだ真耶と紅兎は、どちらからでもないキスを最初は、触れるだけ、回を重ねる毎に深くお互いを求めるように舌を絡め唾液を交換しあい・・お互いの肌が触れ合う面積が広がり・・・・・

これ以上書きません！自粛です！！

それでも言へとぐ！大人の一歩手前まで！最後の一歩は、真耶さんが寝付いたため中止。

「今田は、有り難い」「やつこ様でした」

「俺も楽しかつたですよ。真耶さん・・・ん」

「は・・・ん・・・あや／＼＼＼＼

「明日からまた、教師と生徒ですね。」

「はい。それでも・・・私の部屋開けときますね／＼／＼

「んう・・・紅兎さん・・・て・・夢か・・・・・・はあ・・

・何時か現実にしたいな／＼＼＼「

学園の授業で何時もの様に白井君達生徒達の元気な声を聞き授業を始める。

真耶ヒーローテート ? (後書き)

夢落ちです。流石に奥手の真耶を大胆にするのは、無理かな?

放課後の訓練（前書き）

次回に個人戦出せるといいな。

放課後の訓練

ラウラ達が転向してきて五日が経つて、今日は、土曜日だ。
I.S学園では、土曜日の午前は、理論学習。午後は、完全に自由時間になっている。しかも土曜日は、アリーナが全開方なので、ほとんどの生徒が実習に使う。それは、俺達も同じで、今日は、一夏のグループと紅兎のグループで分かれて個々の話をしている。

「先ほどの模擬戦でもそつだが、紅兎がランスを使うとき、一瞬ぶれて見える事があるが何故だ？」

「お～。ラウラ良く気が付いたな。」

「そ・・・そつか／＼」

あれ以降、ラウラの表情が柔らかくなり表に感情が出やすくなつた。さらに、何故か俺と行動する機会が増えている。

「そうだな。俺の元々居た場所は、知つていいのか？」

「学園都市と呼ばれている位と・・・特殊な事をしている位だな。」

「特殊か・・・確かに。学園都市は、超能力者育成機関・超能力発現研究施設と言つたら分かるかな？」

「超能力だと！？本当に存在するのかー！」

ラウラは、興味がわいたのか本音のように目を輝かせ聞いてくる。

試しにEISを解除して、手のひらを上に向かう形で「ウカウカの田の前に持つしていく。

ボツ――！

手のひらに野球ボール大の炎を出現させると・・・

「おおおお――！――どうなつてこらのだ？？？？」

紅兎の出した炎に手を伸ばし、熱を確かめたり紙を燃やしてみたりと子供のような反応を繰り返していた。

一方一夏達

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応分かつてこらつもりだつたんだが・・・。
・」

シャルルにEIS戦闘に関するレクチャーを受けている。

「うーん、知識として知っている感じかな。さつき僕と戦ったときもほとんど間合いで詰められなかつたよね。」

「うつ・・・確かに。『瞬間加速』も読まれてたしな・・・・・紅兎は・・・」

「一夏のHJは、近接格闘オンリーだからより深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に、紅兎君の場合は、射撃を熟知してるし・・近接武装も有るし根本的に戦闘センスがオールラウンダーなんだよ。たぶん一年最強じゃないかな?」

「ぐつ・・・・一年最強・・・」

「一夏の瞬時加速つて直線過ぎて反応できなくても軌道予測で攻撃できひやつからね。」

「直線過ぎ・・うーん」

一夏が変な事をする前に釘を刺す。

「あ、でも瞬時加速中は、あまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね。」

「・・・・なるほど。」

シャルルの話を聞くたびうなづく。なにせ、シャルルの説明は、分かりやすい。擬音だらけの箇。感覚で話す鈴。専門用語で話すセシリ亞。俺に教えてくれる自称コーチの有り難い言葉は、俺には、理解できない。

一夏サイドEnd

紅兎は、ラウラと分かれた後、生徒が居無くなる使用時間ぎりぎりまでアリーナで機体チェックを続けていた。そして地上に降りると一夏達も訓練を終え帰るところだったらしい。

「男同士だから、別にいいじゃないか。そういうえば、シャルルは、いつもしっかり着替えてから出でてくるな。別に気を遣わなくても」

「一夏がもつと、気を遣わないとダメなんだよー！」

端から見ると・・・危ない発言連発している一夏。

「一夏・・・お前・・・あつち系か！？寄るな！..半径2メートル以内に入るなよ！..！」

一夏の発言に後ずさる紅兎は、軽蔑の意味を込めて言つと・・・

「ちげー！..そんなわけあるか！..」

「だつたら、一人で着替えればいいだろ？がー・シャルル、辛くなつたらいつでも相談に乗るからな。」

「有り難う紅兎。」

「だからー・違うってー！」

「寄るな！織斑先生に相談しどくか・・・シャルルの身が危険と・・・

・

「違う…………」

とうあえず、一夏を先に着替えさせシャールルの着替えに乱入しない様に見張る形で更衣室を使用した。

余談だが・・・

しばらく、一夏は、簞・オルコット・鈴音から軽蔑の目で見られていた。

紅兎の部屋に、ちょくちょくシャルルが来るようになつた。

放課後の訓練（後書き）

原作読んで・・・一夏の発言危険過ぎーーー！

今作では、一夏の立場は、弄られ役です。シャルルを一夏にくつ付けるの何か可哀想になってきた・・・今後ヒローアイン変更有るかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622y/>

とあるIS使い

2012年1月10日22時20分発行